

大正四年六月二十日發行

(非賣品)

第四高等學校
北辰會

北辰會雜誌

第七十三號

内容

曾我兄弟の末葉	平泉澄	一頁
ヅシリー牧師(トルストイ原作)	芳月生	一二
ネカリベラリズム	超世	二三
雪の日の漫筆	しづか生	二五
プラトンの愛	たかし譯	三一
明るい硝子窓を透して	迷花生	三三
小林恭太郎君へ	永井志津香	四四
嵐を前にして	水上茂	五〇
むぐらもち	多田不二	六二
断章	あゝる人	六五
淋しさ	泛舟	六七
地上哀詠	福光正次	六九
短歌	照井	七一
四高俳句鈔		七二
發火演習記事		七二
叙任辭令		七五
部報		七七
		七八

曾我兄弟の末葉

平泉澄

虞姫が傳記は項羽の別宴に終る可く、靜が物語は鎌倉の舞樂に閉づべし。若き誇の花の夜の、見はてぬ夢こそなかなかにかしけれ。我や何の迂愚ぞ。今禿筆を驅りて曾我の里に落葉をば拾はんとはする。さても今精細なる研究をなすべく十分の記録を有せず、又犀利なる判定をなすべく十分の眼光を持たず。只かの兄弟の孝烈を景慕しては武藏野の草はみながらとこそ思へ。近く日本及日本人に諸家の曾我兄弟觀の載せられしに刺激せられて、

我が見知り聞き知るかぎり玉石共にかきつらねんと思立ちつ。突如として曾我兄弟の子孫ありといはゞ世人は言の奇矯に驚いて之を一笑に附し去らん。けだし世間流布の物語一も之に云ひ及ばざればなり。抑も曾我兄弟の事蹟は古くより民間に云ひつぎ語りつがれて士風の振肅に資せられ、(南北朝時代の保曆間記に是を曾我物語と申すとあり)足利時代に入りては謠曲に切兼曾我、調伏曾我、元服曾我以下七つの曲目あり。されど流布の物語書は比較的新らしく、最古のものを天文二十三年の本門寺本十卷十冊となし、次を本門寺本の和譯なる富士大石寺本、次を寛永四年六月版十二冊本、次を寛文三年版十二冊本、元祿十四年版本、曾我記五冊(元祿七年貝原益軒の序文あり)、享保十年版曾我物語評判十五卷十二冊等となす。

今余輩が之に對應して兄弟の末葉を顯はすに資する舊記はいつ頃のものなるぞ。暫らく項を分つて之を説かん。

一、平泉寺由來記。平泉寺には之を再興縁起と稱す、その由來記と呼ぶは民間流布の本なり。一卷あり、寛永十癸酉天二月佛涅槃日賢聖院大僧都法印實雄が大僧正天海、大僧都日海等足利時代の遺老の口述を受けて平泉寺六千坊隆昌の狀況とその滅亡及再興の次第を記せるものなり。記述の年代古きも、古文書によりてかけるに非ずして、古老の記憶に頼りたれば人名坊名に多少の錯誤あるか。

二、大谷遺蹟録。四卷あり。眞宗の學僧先啓了雅が元文三年その十九歳の時に志を立て稿を起して簡擇三十年、明和八年冬上梓せるもの。

三、伊藤氏系譜。時致より始めて十九世仁左衛門政之に至る年譜なり。本文延享年中に終る。序文あり曰く癸未秋七月靈岳樵隱法書子得生菴西臚下と。得生菴は平泉寺玄成院の末流なり。得生菴の事も、菴主の事も湮滅して傳らざるが、我れ曾て向三昧に墓を探りてゆくりなくも確證を得たり。墓石に曰く、

得生庵開祖

明和七寅年

法印權大僧都靈潤慈辨大和尚位

(缺)月廿六日

當に知るべし靈嶽樵隱といへるは正しく靈潤慈辨大和尚なる事を。更に今明和七寅年より逆算して癸未の年を求め、寶曆十三年を得たり。系譜の本文と年曆相合す。

伊藤氏の事は我が中學を卒業せんとする春訣別の會場に之を耳にして、後一度ゆいて系譜

の副本を得て寫し來りしが、不幸原本を見て史的價値を評定するに至らず。遺憾多し。

四、宗祖七十三輩考。安永頃の人釋良緣惠旭が記する所。聞くならく、惠旭に宗祖世録五卷十冊の著あり、精緻周密を極むと。我れ僻地にありて未だ一見するに及ばず。

五、今以上の諸書を幹本として之をにぎはすに親鸞上人の末燈抄(建長四年二月二十四日の御文)本願寺通紀、地名辭書、日本史蹟、各種曾我物語、漫遊人國記、日本及日本人等の枝葉を以てせんと欲す。若し夫れ伊藤系譜の原本を探りてその權威を問ひ、大谷派諸書の源流を究めて比較考量し、最後の斷定を下すの快舉は之を數歳の後に期せん。

曾我物語を按ずるに兄弟は婦女との關係多かりしが如し。これ一はかの大石内藏助の秘計と同じく仇討の便宜を得ん爲なりしなるべし。我等は只三浦博士と同じく浦若き兄弟がよく遊女の誘惑に打勝つて大義をあやまらざりしを讚嘆せんとす。

曾我物語に現れたる兄弟の艶聞は十郎に三件あり、五郎に一箇あり。

A. 十郎と虎御前。最も有名なる話にて、曾我物語のみならず、戯曲小説に廣く行はる。東鑑建久四年六月一日の條下に、祐成妾大磯遊女號虎雖被召出之如口狀者、無其咎之間、被放遣畢、十八日虎雖不除髮、著黑衣袈裟於宮根山別當坊修佛事則今日出家赴信濃國善光寺、時年十九歲也見聞縉素莫不拭悲淚云々とあれば事實確かなる可し。猶文明十八年道興准后の回國雜記、善光寺文書等に見わたり。

B. 十郎と三浦平六兵衛が妻。曾我物語(眞享版)卷第四、十一平六兵衛が喧嘩の事に見ゆ。

十郎と三浦の妻とは従兄弟なりけるが「十郎彼に忍びて情をかけたなり」ければ三浦との關係困難になり五郎の威嚇によりて事なきを得たり。

C. 十郎と三浦別當の婢片貝。同卷第四十三浦の片貝の事の條に見ゆ。十郎叔母に計られて片貝を連れ出さんとせるなり。

D. 五郎と化粧坂の遊女。同卷第五九、五郎女に情を懸けし事及十三五郎が情かけし女出家の事の條にあり。五郎の淺からず思ひし女梶原源太景季に獨占せられし時五郎のよめる歌

あふと見る夢路にとまる宿もがなつらき言葉にまたもかへらん

女恥ぢて出家し十六歳と云ふに墨染の衣に身をやつし諸國を修行して虎御前を尋ね共に行ひすませりといふ。

兄弟既に婦女と關係あり、時に落胤ある豈理なしとせんや。

一、十郎祐成の子孫

分つて二となす。一は越後三島郡大津郷なる久須美氏の系統にして一は相摸淘綾郡高麗寺山下善福寺開祖了源なり。前者は近年角田浩々歌客がその著漫遊人國記に紹介せしによりて世に知らる。傳ふ祐成曾我の家でありし頃侍婢に通じて姪めるあり、建久の變、侍女は答の身に及ばん事を怖れて遙かに越後大津に赴きたり。これ曾我兄弟の末弟禪師房實永が越後の國上寺(東鑑に久我躬、曾我物語に九上に作る)にあるをたよりてなり。然るに行き違ひに實永は鎌倉に赴いて自刃したれば、大津の郷民彼女を憐みて住居せしむ。幾許ならずして男子出生し久須美權兵衛祐寛

と名乗り傳へて今に至ると。我れその眞偽を知らず、又一度書を以て久須美氏に照會せる事ありしも返書を得ず。我が知識遂に人國記を出でざる也。悉しくはゆいて漫遊人國記を繕け。

善福寺了源に至りては最も信を置くに足る可しと考へらる。

祐成に遺子あり、父の死後出生す、幼名を祐若と稱す。了雅の大谷遺蹟録は此を以て虎の生む所となす。繼祖父曾我の祐信に養はる、長じて河津三郎信之と號す。年二十一歳和田台戰に武名をあらはし、平義時に吹擧せられて將軍實朝公の仕官となる。功によりて平塚の郷を恩賜せられ彼處に住す。是より専ら忠義を勵し父祖の名をあらはす。信之つらく往事を思ふに父祖三世天命を盡さず彼等が菩提はいかにして求めんと。然るに元仁甲申年平義時卒するや爰に厭離の心暮りにして七月初旬親鸞聖人の禪室に入り名を平塚の了源と改め、他力攝生の旨趣をこまやかに聞き師資の約をなして常隨給仕せり。

以上多くは大谷遺蹟録龍頭山善福寺記による。伊藤氏系譜亦殆んど相似たり。地名辭書に引ける新篇風土記の説は之に異なる。曰く、了源は初め天台を學び平塚入道法求と稱し花水の幽栖に在りて高麗權現の別當職に補せられしが寛喜元年更に親鸞の徒弟となり此寺(善福寺)を起立すと。按ずるに親鸞はこの間東國にありて常陸武藏相摸の間を往來教化し文暦元年歸洛したれば元仁寛喜共に年代に於て不可なし。是非を知らず。或は風土記の説正しきか。元仁元甲申は親鸞が始めて獨立して一向宗を開きたる年なり。

了源師の恩寵厚く六老僧の一にかぞへらる。今按ずるに關東六老僧に四説あり。但し了源はそ

のいづれの説にも入りたり。又關東七ヶ寺に二説あり。善福寺はそのいづれにもかぞへらる。重んぜらるゝ事推して知る可し。

文暦の初年親鸞歸洛の志あり、了源別離を悲しみ哀痛切なり、親鸞眞實を鑑み自ら影像を彫刻して彼に與へらる。

了源、華水の邑、宿河原の園に一字を起立して善福寺と號し念佛往生の法をひろめて普群生を化し、建長三辛亥年三月十二日午の正中に往生の素懷を遂げき。時に行年六十歳。翌年親鸞書を以て了源の往生を嘆稱して關東の諸弟に示す。其趣末燈抄に見えたり。

曰く、又ひらつかの入道殿の御往生のこころ候こそ返々申にかきりなくおほへ候へ、めてたさ申つくすへくも候はず、をのくみ往生は一定とおほしめすへし下略

建長四年二月二十四日

先啓了雅賛して曰く、然は了源武門の家に生れて忠義を勵して名を天下に露し菩提の道に入り萬法難解の理を知り、他力易行の大道に入て高祖の嘉賞に預るまことに二世の悉地達人と謂つべし下。

宗祖七十三輩考に見ゆる曾氏復讐志、行化録、又は宗祖世録等を見るを得ば、更に多くを知る可きも今は力及ばず。

善福寺は相摸洵綾郡高麗寺山下にあり。龍頭山華水院と號す。洵綾は陶陵とも書けど余綾とかくを正しとす。ヨロギと讀む。今中郡へ合併せり。高麗寺山は寺によりて名を得たり。鷄足山雲

上院と號す。創立遠く養老年間にあり。弘安十一年鐘銘に高來寺、重須本會我物語に高禮寺に作れど高麗寺とかくべし。蓋し伊豆山、箱根山の神と同じく外蕃の神を祭るなり。地名辭書に「按するに往昔高麗人東國七州に散居せし事續日本紀に見えて本州も其住國の一なり、然るに其居住の地跡、國中他に斥すべき地なければ恐らくは當所なるべし、扨當社も彼黨居地鎮護の爲めに高麗の神を勸請せしも議るべからず」とあり。往古は二十四坊ありしも文祿中減して七坊となり今は廢絶して房宇なく神社存す。了源がその別當なりし事は風土記に見えたり。了源この山の下に住むが故に山下了源と稱せらるゝなるべし。(本願寺通紀)。華水院の稱は花水川にとる。回國雜記に「花水川といへるを渡りて、

咲と見え散と見ゆるや風渡る花水川の浪の白玉

二、五郎時致の子孫

頼朝をしていかなればにやと嘆稱せしめたる程ありて曾我の一門勇剛一世に秀でたるが中に、五郎時致の肝魂こそ面白けれ。こゝにその熱血を受けて驍勇雙なく南越の靈山に芳名を留めたる快男兒あり。之を伊藤小五郎時定とす。今主に伊藤氏系譜によりてその痛快なる一生を傳へん。

時致曾て女と親しむ。時致死後翌春正月宮壽を生む。始めは時致の舊好によりて宮根權現の別當東福寺阿闍梨淨寛の許にかくまはれしが三年の後世人の口の端に上るを慎んで女の伯父平泉寺明誓坊覺秀をたのんで越前大野郡平泉寺に移りぬ。十五歳にして元服し小五郎時定と號す。

平泉寺由來記には平泉寺北谷明覺院の娘いかなる所縁あつてか鎌倉に至り時致の妾となれ

り。時致死後懷妊の身にて故郷へ歸り父明覺院方にありて時定を生むとせり。

この時に當り平泉寺の富強北國に冠たり。坊々院々臺をならべたり。その中に三世院の大衆覺源といへるは生國備中、瀬尾太郎兼康の孫なり、智勇を以て自慢す。曾て時定の勇を嫉み恥辱を與へん事を謀る。一日一山の大衆櫻狩を催すや覺源時定同じく行く、途上聊か口論に及ぶと雖も大衆とめて許さず、終日花を賞して寺に歸れる時はさすがに春のリンガリングデーもどつぷり暮れたり。暫らくありて覺源先刻の遺恨を果さんが爲に書を時定に送りて戰を挑む。時定辭するに及ばず下馬の外に出向す。

三世院覺源その夜のよそほひは、下に鎖り袴鎖り鉢巻を着し、上に黒ひさやの小袖を着、黒鞆卷の大太刀をはき、白柄の大長刀の半月の如くにそれをくき短かに執つて今や今やと待かけた

り。時定生年十八歳、明眸紅顔の美少年、紺瑠璃の小袖を着、三尺五寸の太刀に二尺三寸こがねづくりの重代の刀をはき副へ、尋常に装ひ出てたり。覺源はやくより待ち設けたる所なれば聲をかくると共に大長刀を水車の如くにまはして、幕地に打つてかゝる。かゝれば院々谷々の騷動なゝめならず、一山の大衆咸く出張して之を遮らんとす。覺源怒つて罵倒す。時定敢て刀を抜かず。覺源奮然として叱して曰く刀を抜かざるは降れるか臆せるか甚だ卑怯なりと。時定大に笑つて汝等如き奴輩をあしらふになんぞ刀を以てせん只よもすがらもてあそばんと語りしかば、覺源嚇と怒つてまつしぐらにうつてかゝる。頃しもきさらぎ十六夜の、蟻の這ふさへ見え渡る、月釋氏が

嶽をはなれたり。春色惱人眠不得、月移花影上欄干といひけん、あはれ花香ばしく月明らけき春の夕べ、朱欄翠箔を背景として、艶に床しき装の、美はしき少年衆の戰、これや柳を織る鶯か、花に狂ふ蝴蝶か、はた湖光に迷ふ翡翠か。うき事多きうつし世に又せめてもの思出なるべし。旋轉たる大長刀の上、時定或は飛びのぼり、或は飛びぐだり、さながらに飛鳥の如く、水月に似たり。そのむかし京は五條の橋の上に、牛若丸と武藏坊とが勝負を争ひけむありさまも之には過ぎじと覺えたり。覺源しばしの間に長刀を踏み落さるゝ事三度、竟に力屈して平伏せり。時定暫く慮つて曰ひけるは、今汝を誅せばかへつて人臆せりとや云はん、殊に宿仇あるにあらず、さらば汝を助く可し、僧侶に相應せざる行跡、以後固く慎しむべしとて助け起せしかば、覺源元來極惡の者にはあらざりけり、忽ち感服悔過して、あはれかゝる情深き丈夫に腹黒くも恥辱を與へむとせしは何たる天魔の所爲ぞやと云つて盟つて之に従ひぬ。時の人今義辨とゝなへてもてはやしき。

明誓坊覺秀感喜の餘り、孫女小萬年十六なるにめあはせんと欲す、時定聊か欲する所ありてきかず、暫らく東國に客遊せん事を乞ふ、覺秀留むるを得ずしてその意に任かず。こゝに於て貞應二年癸未三月五日獨り平泉寺を立出で、伊豆駿河に赴く。この時三世院の覺源時定を送りて今庄に至るといふ。日を経て箱根に至り權現に參籠し舊來の恩由を謝せるに、別當も遠問の信に感じて數日留めて懇談せり。次に駿河にゆいて父の迹を訪ひ、又相陽平塚に到りて從兄河津三郎信之に面會してこもこも亡父の懷舊を述べて悲涙時をうつす。

信之の曰く、御身と我れと胎中父に離るゝ宿運の拙なきをなげくにはあらず、只雙父祐經を誅

するに至る粉骨碎心察するに餘ありと。又重て曰ひけるは、我等敵なしまたれをか恨んや。我れ生年二十一歳の頃武名を和田合戦にかつやかして實朝卿の幕府に仕へ平塚郷を賜はりしが今や全く爵祿に望なし、つらく惟んみれば生ける者は必ず滅す釋尊だも未だ免れず、世は成く無常なり、幸に親鸞上人の子弟となり専ら佛願を念じ一寺を創建し父の菩提を求めんと欲す。御身亦平泉にかへらば明誓の坊を繼いで同じく弔ふ可し、殊に覺秀足下との婚姻を望む事こそ幸なれと再三心底を盡して勧めぬ。

既にして留る事百日ばかり慇懃に別れを告げてはるかに邊塞の行を催す、信之手を分つに忍びず送つて箱根に至る、時定日を経て越前に入る、覺源また出で、北庄に迎へ、共に平泉に歸る。

爰に平泉寺金剛院の客僧に淨辨なるものあり、いにし辛巳四月に山門より來り文武を以て鳴る。明誓坊覺秀の孫女の麗質あるを見て敢て聳たらんと望めども、覺秀は時定を思ふが故に許さず。淨辨おもへらく所詮時定を亡き者とせば我が願望成就せんと。ある夜ひそかにその寢所に忍び入りしに、小五郎時定はやくも之を悟り、よもすがら脇息によつて欺き眠る。淨辨甲冑を着し太刀をふりかざし只一打と打ちおろすを、さはさせじと脇息もて受けとめ、すかさず蹴倒して足下に踏みにじり嘗つて曰く、汝はなはだにくむべきも僧形なるが故に一命を免すとて片耳をきりて放ちやりしかば、辨戰慄して夜中にいづちへか逐電したりけり。

時定乃ち覺秀の諱となりて明誓坊をつぎぬ。あくる元仁元年七月平塚より特使到來して信之の書柬を持參せり。大要に曰く、信之この月上旬親鸞聖人の門弟となりて名を了源と改めぬ。足下

愈明誓坊を相續せるや否や、了源一たびゆいて足下を見んと欲すれども、師に事ふるに暇なし書を以て言に代ふと。使者一日逗留して委細返書を得て歸る。

時定、弘安二年二月九日八十六歳にして卒す、法號教秀、一男一女あり。連綿として遺流繁榮す。

以上はすべて伊藤氏系譜によれり。平泉寺由來記の傳は之に異なる。曰く、

「南谷に信濃坊義辨と云僧有て是又大勇強力時定に劣らす或時時定中宮へ毎夜日參しけるに彼義辨聊か宿意有て時定を討んと此櫻の下に隠れ居けるに如何しけん後に双方名乗合て舍弟の契結ける同氣相求とは是等の事なる哉夫より以降義辨隱櫻と云花は世に吉野櫻と云類にて數百年來の古木なり此地今は當山の代官原藤右衛門か屋敷と成て此家の後に有」

思ふに必ず何等かの錯誤あるべし。この曾我五郎の子孫の平泉寺明誓坊系に關しては猶面白き物語多く、又研究すべく解決すべき問題多し。今は我が力にかなはず。すべて後に譲る事とせり。

大正四年五月二十二日梅霖蕭條たる日、終日病をおして筆をとり十一時に至りて漸やく稿を脱しぬ。今影を戀ふて未成眠、更就餘光坐。あはれ我が見知るかぎりの友ごちよ、この拙なき一篇が諸君の目に入らん時、我等は校を離れて四散し山河萬里を隔てむ。浮生を以て後會を期せんと欲すれば、かへりて石火の風に向つて敲く事をかなしむ。別れにのぞんでこの一篇をあまねく諸君に獻す。

秋のある朝まだ夜の明けぬ前に、汚く修繕せられた馬車がガラ／＼と鳴り立て、茅葺の二重屋根になつてゐるヴジリー牧師の家へと進んで行つた。長い上衣のカラーを反り返して縁なしの帽子を被つた百姓が馬車から飛び下りた。そして馬を引き廻はして牧師の家の臺所と思つた其の窓を大きな鞭で叩いた。

「ごなたですか」

「牧師さんに來て頂きたいんです」

「何の爲にですか」

「病人の爲に御願ひしたいのです」

「何處から御いでになつたのですか」

「オズドレデから參つたのです」

一人の男が燈火をつけて庭へ出て來てその百姓の爲に戸を開けた。

牧師の妻——丈の低い頑丈な女で縫模様を取つたジャケットを着てゐる肩掛で頭を被ふて長靴を穿いてゐた——が出て來て不快な嗚聲で言つた。

「どうして此處へ御出でたのですか」

「牧師さんに來て頂きたいので參つたのです」

「お前何考へてゐるのかい。まだ火も焚かないで」

「もう火を焚いてもよい時で御座いますか」

「言はなくなつて解つてゐるぢやありませんか」

オズドレデから來た百姓は臺所へ行つて聖像の前で十字を切つたそして戸の傍にあつた椅子にかけた。

百姓の妻は長い間苦しんでゐた。そして死胎を産んだので今にも死にそうであつた。

百姓は自分の茅舎の中にどんな事が起つてゐるだらうか知らんさじつと考へながらも又どうして牧師を連れて行かうか自分が今やつて來た通りにコッソリを通つて行かうかさもなければ他の道を廻つて行かうかさ心そは／＼しさうに考へてゐた。其の村の近くは道が悪くて川は一面に氷が張り詰まつてゐた然し其の氷は通れる程には丈夫でなかつたが彼はどうかかうにか渡つて來ることが出來たのである。

一人の稼人が入つて來て一抱への樺の木の丸太をストーブの側へ投げ出したそして百姓に其幾分を焚きつける爲に折つて呉れど頼んだ所で百姓は上衣を脱いでやり出した。

牧師はいつもの通りに元氣に満ちて目を覺した。まだ寢床の中にある時に十字を切つてお得の「天に在します神に」と言ふ祈禱を言つて又「神よ吾々に恵を垂れ給はんことを」といふ言葉を幾度も繰り返した牧師は起きてから手水を使つて刷毛で髪を撫で靴を穿いて袈裟を着たそして聖像の前に立つて朝の祈禱を始めたロードプレーヤーの中程の「自分達の心に背いて犯した罪過を自

分達が赦す様に吾等の罪過を御赦し給はらんことを」といふ言葉の處まで言つた時に彼が其の前日酔つぱらつてゐた執事に出會つて「偽善者フハリサイ信者奴」と言はれたことを思ひ出して祈禱を止めてしまつた。彼は自分に多くの罪過があることを自覺してゐたものゝ此の偽善者といふことが彼の罪過の中の一つであるとは夢にも信じてゐなかつた。それで此の偽善者とかフハリサイ信者とかといふ言葉が彼の頭を悩ましたので此の執事の言葉を憤慨した。「そうだ、彼奴を許してやろう——そして彼が幸ならんことを」と言つて祈禱を續けた「神よ吾々を誘惑に陥らしめざらんことを」と言つた時に其の前夜、とある素封家モノモチの家で夕方の祈禱を終へてからラム酒の入つてゐる熱い茶を渡された時の氣持を思ひ出した。

彼は祈禱を終へてから自分の姿を鏡に映して見た。——その鏡は凡ての物が歪んで映つた——、可なりに大きい禿頭ツルの周圍に圓形に生へてゐる滑かな美しい髪を撫でながら薄い髯のある温和な寛大さうな顔を嬉しそうに眺めてゐた其の顔は四十二歳とは思へぬ位若く見えた。それから自分の居間へ入つて行つた。丁度其處へ妻が大急ぎで煮え返つて溢れかゝつてゐる煎茶瓶をやつこの事を持つて入つて來た。

「何故そんなことしてゐるのだね、テクラは何處にゐるの」

「何故そんなことをするのだね」と妻は嘲けるやうに眞似て言つた「妾がしなくつて誰がするのですか」

「然し何故こんなに朝早くするのだい」

「男の人がオズドレゾからあなたを迎ひに來てゐます其の人の妻が死にかゝつてゐるのですつて」

「何故もつと早く呼んで呉れなかつたのかい」

グジリーは茶に牛乳を入れないで呑んだ(金曜日であつた爲)そして聖餐を濟ましてから毛皮の上衣を着て帽子を被つて澄まして入口へ出た。百姓は其處に待つてゐた。「ミトリさんお早やう」と牧師は言つて袖を振り返り返して十字を切つた。そして接吻キッスするために爪を短く切つてゐる小さな頑丈な手を百姓の方へさし出した彼は階段の處へ歩み出た。太陽は上つてゐたが覆ひかゝつてゐる雲の陰になつてゐてまだ見えなかつた。百姓は庭から馬車を出して戸口の處へ持つてきた。牧師は後車の軸へ足をかけて中へ入つたそして周圍グルに枯草を捲きつけてある腰掛にかけたミトリは牧師の傍へ腰掛けて其の樽のやうな馬車に繋がれてゐる馬に鞭打つた馬車は凍みてゐる泥の上をガラガラ馳つて行つたをして美しい雪がチラ／＼降つてゐた。

二

グジリーの家族は彼の妻と妻の母(其教區の前牧師の寡婦)と三人の子供——男の子二人と女の子一人——とであつた。一番頭の息子は僧侶學校を終へて大學へ入らうとしてゐた二番息子は——十五歳で母の氣に入り子——まだ僧侶學校にゐた十六歳になる娘レナは自分の運命に不満足であつたが家にゐて母の手傳をしてゐた。グジリーも若い時には矢張り其の學校で學んだ彼は非常に勉強して一八四〇年首席で卒業した次に教會の大學へ入らうとしたそして教授や僧正に成ら

うといふ空想すら描いてゐたヴジリーの母と言ふのは役僧の後家で三人の娘と彼の兄なる大酒飲の息とがあつて非常に貧しい生活を送つてゐたのである其の當時彼が行つた措置は彼の全生涯に犠牲と放棄との暗示を與へてゐる。彼は母を樂させる爲に大學を去つてとある村の牧師となつたそれは母を愛する念から起つた事であるが彼自身はそう信じてゐないでかうした決心は智識的の業に倦んで厭になつたのだと思つてゐたのである。その牧師の職に就いた處はある小さい村の一教區であつて其處の前牧師の娘と結婚するといふ條件で與へられたものである。其の教區は豊富なものではなかつたと言ふのは前牧師は非常に貧乏であつて妻と娘二人を困窮の中へ殘して去つた程である爲である其の教區を得るやうに彼に助力して呉れたアンナは飾りけない女ではあつたがどう見ても美しい女であつた。アンナは全くヴジリーを魅してしまつた。そして彼に結婚を迫つて遂々夫婦になつた斯様にしてヴジリーは牧師となつてアンナチコノヅナと二十年間幸福に暮した牧師となつてから彼は髪を短くしてゐたが後になつて又長く延した。アンナが一學生であつた前執事の息子に小説じみた戀をしてゐたにも關はらず彼は更に一層深い情愛を以て彼女を愛したかの様に前と變ることなく親切にしてゐたそしてアンナが學生に戀したといふことの爲に自分の心に湧いて來た憤怒の情を抑へ付けやうと思つた。

此のことが彼が犠牲と献身とを爲す動機となつてさうく大學を放棄してしまつたそして靜な心の喜を覺えたのである。

三

初の中は二人は無言で馬車を進めて行つた其の村を通つてゐる路は凹凸があつたので緩つくり行つたけれども馬車は路の兩側へ投げつけられるやうにがたついて牧師は臂を腰掛から滑り落したり又元の位置になほつたり脱げやうとする袈裟を身に纏つたりしてゐた。

二人は其の村を殘し去つて草地の中に流れ込んでゐる溝を渡つて間もなく牧師は話しかけた。

「ご家内の病氣は随分悪い方ですか」

「どうも命があるとは思へません」と百姓は氣の進まない調子で答へた。

「それはどうも吾々人間のどうとすることも出來ないことで唯神様の御心なんですからね神様の御心にはごんなものも逆ふことが出來ないものですからね」と牧師は言つた。

百姓は頭を擡げて牧師の顔をチラリと見た時に怒氣を含んだ答をしやうとしたが情愛のこもつた牧師の様子を見ると心が和らいで唯こう言つた。

「牧師さんそれや神様の御心かも知れませんがね然し私の身に取つては實に辛いことなんですよ私は唯一人ぼつちです子供はごうなりませう」

「落膽してはいけません子供達は神様が保護して下さいます」

百姓は何も答へなかつたが馬がだんく遅くなり出したので「こん畜生」と怒鳴つて手綱を強く引張つた。

彼等は森の中へ入つた其の路はまるつきり悪かつたそれで路の善い處を選んで行つたので暫く黙つてゐた其森を通り越すと往還へ出た。其の邊の畑は秋蒔の穀物が芽を出してゐて非常に美し

かつた間も牧師は話しかけた。

「可なり收穫の見込があるね」

「悪いことはありませんね」百姓は言つたがすぐ黙つてしまつた牧師は尙も話を續けやうとして見たが何もならなかつた。

二人は朝飯頃に病人の家へ着いた。

其の女はまだ命はあつた苦痛は止んでしまつてゐたが非常に弱つて床の上に臥したまゝで動けなかつた其の明白した眼だけはまだ生命が無くなつてゐないことを示してゐた彼の女は懇願するやうな様子で牧師を眺めたそして其の眼は彼だけに据え付けられてゐた彼の女の側にとつた女が立つてゐた小供達はストロブの上に立つてゐた。年頭の十歳になる女の子はだぶ／＼のシャツを着て寢床の側にあつたテーブルの傍に立つて丁度大人のやうに顎を右手の上に乗せ左の腕で右手を支へて静にじつと母を眺めてゐた牧師は寢床の側へ寄つて聖禮をしてから聖像の方を向いて祈禱を出した年寄つた女は死にかゝつてゐる女の側へよつて其の顔を見ながら頭をそつと動かしてリンテルで顔を覆ふたそれから牧師の處へ近寄つて彼の手の手の中へ貨幣を入れた牧師はそれを五コベツク(約七錢五厘)だと知つたけれど受け取つた其處へ病人の夫が入つて來た。

「死にましたか」と言つた。

「もう死にかゝつてゐます」年よつた女が答へた。

此の言葉を聞いて女の子は口の中で何やら囁きながらワツト泣いた。そしてストロブの上の三

人の子供も一しよに泣き出した。

百姓は十字を切つて妻の側へ寄つた。そして顔の覆を取つて眺めた。其の白い顔は非常に静な平穩なものであつた彼は死んでゐる女の側に立つて暫く見てゐたがやがて其顔を元の通りに覆を掛けて幾度も十字を切つたそれから牧師の方を向ひて言つた。

「發ちませうか」

「ハ行つた方がよいでせう」

「では一寸馬に水を呑ませませう」と言つてその茅舎を出て行つた。

年老いた女は此の母を失つて食物や着物を與へて呉れるものもない孤兒を巢から出たばかりの雛鳥に譬らへて悲哀な歌を誦つた。其の悲しい歌の一句を終る毎に太い息をついたそして非常に悲しんだ爲に愈々深い感動に陥つて我を失つてしまつた。

牧師は之を聞いて此の子供を非常に可愛そうに思つて助けてやらうと思つたそしてその前夜素封家の家で夕方の祈禱をして貰つた半ルーブル貨幣(約五拾錢)を持つて居ることを思ひ出して袈裟の衣囊へ手を入れて財布を探つた彼は自分の得た金はいつでも妻に渡したのであるが其の時にはそれを渡す時がなかつたのであつた。彼は後にどうなるかといふことも考へずに其の貨幣を取り出して年老いた女に見せて窓臺の上に置いた。

百姓は上衣を着ないで入つて來たそして「私は棺を拵さへる板を取りに行かなければならんで私の友達にあなたを馬車に乗せて歸らして呉れるやうに頼んで置きました」と言つた。

ヴジリーを乗せて行つた友達のテオドレは交際すきの快活な大きな男であつて髪も髯も赤かつた。彼の息子は丁度其時新兵に徴られたのでテオドレは其を祝して酒を飲んだために非常によい氣もちになつてゐた。「ミトリの馬は疲れ切つてゐました友達を助けられないやうなことがどうして出来ませう友達を助けられないやうなことがどうして出来ませう友達を助けられないやうなことがどうして出来ませうお互に親切にしくちやならないでせうね」そしてあなた」と言つて尾のきちんと組んである栗毛の馬を怒鳴りつけながら鞭打つて駆けさせた。

「静にやつて下さい静に」牧師は馬車ががたついて身体が揺られたのでこゝろ言つた。

「じやもう少し緩つくり行きませうだがあの女は死にましたか」

「はあー死にました」

髪カミの赤い人は同情の意を表はさうと思つたがまた戯談を言はうと思つたので。

「神様は妻を一人奪つてしまひましたからまた別な妻を送つて下さるでせう」と笑はせやうと思つて言つた。

「然しあの不幸な人には實際氣の毒な事です」牧師は言つた。

「仰つしやる通り御氣の毒ですわあの人は貧乏なのです。そして誰も助けて呉れる人がないので先刻私の處へ来て「私の馬はもう役に立ちませんからどうか牧師さんを連れ歸らして呉れ」と言ひましたお互に助け合つてやるもんでせうね」

「テオドレさん酒を呑みましたね、いけませんね今晝です働かなくちやならん時ですよ」

「牧師さん私が他人の釜で酒を呑んだと御考へになるのですか、私は自分の金で呑んだのです。

息子が兵隊に行くので別れの盃をやつたのですどうか御恕ください」

「恕すの恕さないのつてそんなことは私の知つたことではないのです。單に酒を呑まぬ方がよいと言ふまでのことです」

「御尤なことです。ですが私はどうしなければならんのでせうか若し私がかくざいものであるならば有難いことにはそんなものでもありません、私は人に憚かるやうな暮はしてゐませんアー。ミトリは實際御氣の毒ですわ。誰も憐れまぬものはありませんとしてまあ。つい去年のことです誰かに馬を盗まれたんです。まあ此頃の間には油断がありません」

テオドレはある市場から馬の盗まれた長い話をし出したとしてその馬が皮を取るため殺されたといふことや其を盗んだものが傷のつくほどに打たれたといふことを得々として話した。

「盗人をそんなにひどく打ち叩いたのはいけないですわ」

「ぢや其奴の背中をそつと打てばよかつたのですか」

こんなことを話してゐるうちに彼等二人はヴジリーの家へ着いた。

ヴジリーは自分の室へ行つて休まうと思つたが家にゐないうちに二通の手紙が來てゐた一通は自分の息子から一通は僧正からのものであつた。僧正からののは別にたいしたものではなかつたが息子からの手紙を見てたゞならぬ様子をした。それに妻が彼に半ルールの金を求めた時に其の金

を人にやつてしまつたのに氣がついて益々其の様子が烈しくなつて來た。妻は腹立て出した。然しその原因は息子からの手紙と其の息子の要求を容れることが出來ないといふ事であつた——妻は全く夫の不注意のためだと思つた。

ネオリベラリズム——超世

(僕の一友に次の様な考を持つて居るものがある)

凡そ世に誰か禍福の變轉に驚き運命の變遷を浩歎せざらむ福祉の流に浴して喜び不運の淵に沈みて悲むは人の常なり然れども斷乎として運命の怒濤に反抗し毅然として自己の主義主張を保持するのみならず百尺竿頭更に一步を進めんとせず徒に外界の轉變極りなき運命境遇に翻弄せられ恰も浮草の如くなるは自ら人の勉むべき最終目的及び之に到達すべき天與の性能を度外視するの甚しきものなり。

古來我が日本民族は感情に富む其の激する所往々にして收め難きの功を收めたること甚だ多し我が光彩陸離たる歴史の花は専ら其の感情發動に成りしものなり其の歴史の小説的に情致ある美術的に華麗なるは是が爲ならずんばあるべからず甚だ熱血的にして感情的なる我が民族は又甚だ哀樂喜怒の變に富み怒れば雷霆霹靂となり喜べば春風佳氣となる。

然れどもかく熱血的感情的なるは即ち外界の事物の爲に動搖し易く運命の變化に對し最も喜び最も悲み易し茲に於て我が感情に富める民族は又宿命的となり易きに至れり是を最も明瞭なる例に見るに國家の爲には一死以て盡す所の至誠は最も誇るべき所なれども一度意の如くならざらむか千辛萬苦に耐へ再舉して他日其の目的を達せんとせず夜半の嵐に吹き散る櫻花の如く花々しく死して餘塵を止めざらむとするにあらずや。

然り而して我が民族にして將來かくの如くんば我が帝國の前途は極めて暗澹なりと謂ふべし是を歴史上に見るに遠くは回教徒の建設せるサラセンの前古未曾有の急進隆盛の大帝國も一度歐洲の中原に破るゝや忽にして土崩瓦解せり近くはかの土耳其は十五世紀の中葉俄然として勃興し威風堂々天下を壓し歐亞に渡れる大帝國なりしが露西亞と一戦して破るゝや頽勢挽回するに由なく半月の光は當に歐洲の天地より消えんとすかく古來幾多の悲劇を演せるは其の依つて來る所種々ありと雖も其の根本的主因は皆其の民族の宿命的に傾きしに依るにあらずして何ぞや。

思うて茲に至れば我が民族に對しネオリベリズムの必要を感せずんばあるべからずネオは新の義にしてリベリズムは自由主義の意なりネオリベリズムは從來の自由主義の如く一時の人氣に投ずるが如き浮薄なる泰西思想界の糟粕とは全然其の趣を異にし堅實なる我が國固有の美風を維持するのみならず更に發展せしめて現天下の大勢の趨く所を察し感情を離れ理性の命する所に従ひ故なくして舊に依らず要なくして新につかず猥りに多數の論に傾かず徒に多數の風を學ばず斷乎として決し毅然として行ふの主義なり是實に感情の時代より理性の時代に入らんとする二十世紀の初頭に於ける時代の必然的要求なり此の主義は性質上常に衝突を免れず然れども衝突の中に進歩の意ありされば理性の時代に入るや世の進歩發達は實に驚歎に値するも多し依つて現代に於て意義ある生活をなさんと欲せば衝突に驚かず猛然として立ち須くネオリベリズムを奉じて進むべきなり然らば自己をして意義あらしむると共に國家をして益々隆昌の域に至らしめ吾人の使命を全うするを得べし。

雪の日の漫筆二題——しづか生

一、ふいさき

人の罵る聲を吹き千切つて走る風の音を、冬の叫びと聞きながら不安の内に昨夜は眠つた。大掃除の疊打ちのやうに、雨戸に張つた紙が脱れて、障子をあわたしく打つてをる。昨日さへ洋服の毛穴毛穴から浸み込む寒さに、裸体で居る思ひがしたに、今朝の寒さ！外は珍らしくも恐しい吹雪であつた。朝から晝、晝から晩へと猶も激しくなつてくる、駄々兒が辨當箱も玩具もお母さんの秘藏の品もはてはおさんの下駄まで滅茶々に投げつけるやうに、自然の駄々兒の風は、折角育てた樹も人も、そのみか人の造つた物とし云へば家も藏も橋も垣も、折れよ碎けよ、千切れよと逞しい腕を遮二無二滅茶に振りまわす。三千の鐵板を打つやうな音が迫つてくる、枝は泣く幹は唸る、電線は鋭く吠える、隙間隙間は哀れにむせび泣く、障子に雨は豆炒るやうに打ちつける。その風のフト息つく瞬間は恐しい期待の深い沈黙！腹の底から震はせるやうな大きな轟は奔馬に鞭打つて又も押し寄せる。

蓮葉娘が強い慾情に驅られて、人を忘れ、我をすて、時も所もお構ひなしに、驅けり騒ぐやうに、雪は風に、追はれ、打たれ、投げられて、聲も得立てず狂つてる。如月の梅香る夜を忍ぶやうにフワリ／＼と音もなく降る、あのゆかしさも品もない。衣は破れ、笠はとび、鼻もそがれ咽喉も破られ、腕さし上げ、足も露はに、みめも貌もなくなりて、木葉微塵となつて飛ぶ。折角座はれ

ヂリヂリと息の根の止まるまで、苦しめてやるよ。それに、私が云へば氷の叔母さんもすぐ手を貸して呉れるし、第一人騒がせをさせない丈けでも見よいぢやないか、ネお雪さん。常からお前達是不公平でいけない。岩や木にはそうでもないが、其他の生物と云ふ奴は、中にも贅澤な奴になると、巢を造つたり、隠れ家を造つて引つ込んでるんだから、お前さん達のやうに、唯外へ出る奴ばかり、いちめるのは不公平な事だ。其の点になると、私しや考へたものだ。どんなに隠れて居さんをきめ込んでる奴は、猶更ひどく、苦しめてやるのだ。萬物の靈長だなんて、自銘自賛で、私達が晝寐でもしていると、一人天下をきめ込んだあの面付き。悪くい奴ではあるが元々弱ヤトモトい奴ことだからネ。針のさきであけたやうな、小さいこの穴から、周圍を見まわして、何にも彼も知つてるやうに思てる。其のくせ、どんなに眼玉をぐるぐるまわしたつて、五里か十里しか見えず、どんなに息を殺して眼を据えたつて、物の外ばかりしか見えやしないんだもの、其の上時間にかけちや、一寸さきが闇なんだからネ、唯手さぐりで、あれは何、此れは何、と中味まで、知つたやうに思つてゐる、ほんとに馬鹿なものだ。やれ、體は亡くなつても名は残るとか魂は何時までも死なぬものとか、大法螺を吹いてるが、分つた奴はまあ無いサ。中には分らぬ事があると、目をこすつたり、手つきを變へたりして、大抵の事はザックバランに分つたときめ込んで、いよ分らなくなると、宇宙の秘密なんてホザイてる。けれど其れをまた我々が、向きになつて怒るのも大人氣ない事だ。少し大きな心を以て見ると、あの客氣も結局可愛いものだ。やれ思想問

題だ、やれ主義の争ひだ、やれ人種の悪くしみだ、なんて、眞赤になつて怒り出し、果てはチツボケな煙火や、針のやうなものを以て、澤山勢整ひをして喧嘩をやる。それでお互同士殺したり殺されたり無駄な遊びをしてるもんだ。そりや、よく見ると、中々可愛い所があるよ。をかした箱に乗つて走つたり、木の葉から烟を出して。水の上を渡つたり、近頃は、また遠方同士首をひねくりながら話したり、鳥のまねして飛んだかと思ふと落ち、上つたかと思ふと下り、時々風君のおもちやになつてゐる。まだ細い所を見ると猶面白い。あちらこちらで、小さい奴が増すと、其所所で皺くちやになつたのが焼かれてる。

一番癪にさわる人間でもまあ、こんな可愛いものだ、だから外の連中は猶更溫和しい、一生の間ジーンと動かなかつたり、打つても蹴つても、大抵な事には知らぬ顔ですましてる岩。大きくなれつて云へばどこまでも大きくなつて、少々打たれてもたゞ頭をふるだけ至極神妙な草木ども。獸や虫も少しは動きまわつたり、仲間の争もやるけれど人間から見れや無邪氣なものだ。

オヤオヤ、話が岐路へ入つてしまつたが、云つて見れば、皆、可愛いものなのだ。いちめるなら、よく腹の底まで浸むやうに云ひきかせ、あれこれ偏頗もせずに叱つてやり、大抵の事なら大目に見てやるべきものなんだ。それにお母さん(自然)も皆を大事にして、ヤレ大きくなれ、ヤレ強くなれと、骨身を惜まず世話をしつゝおられるんだから、それを片方から私達で壊して行くのはすまぬ譯だ。お雪さん、お前もじめじめ泣くひまに、少しは此の間中お前達で苦しめたものを、いたわつてやりなさい。随分引搔かれたり、裂かれたり、裸にされたり、中には、手がどび、

足が千切れて、血みごろになつたり、不具になつたり、半死半生のものもあるからネ。少しは疵でも洗つてやりなさい、功德になりますよ。

くれぐれも云つて置くが、悪くい事がありや、私に云つて來ること、あんな騒ぎはもう二度とするものぢやありませんよ。サヨナラ。(四・一・一四)

プラトンの愛

——ヨースコーン著 たかし譯

プラトンの愛とは、愛人を手に入るゝを目的とするに非ずして、愛の對象をたゞ遠くより熱心に尊敬する愛なりと、世人一般に思へり、然れども若し肉慾的愛とプラトンの愛との間に實に斯る差異のみ有り、さればプラトンは愛人を得る力をも有せず決然と斷念する勇氣をも有せざる愛を稱讚せしならば、吾人は此處にプラトンの迷語の横はれるを悲まざるを得ざるなり、實は肉慾的所有の斷念はプラトンの愛の概念に對して重要なに非ずして、イデエンレーとの關連が重要なり、吾人は、物の備へ居る價值善美は、其物のイデエンとの關係より起るを既に知れり、明晰なる且つ藝術的眼を以て世を視る各人の如く、プラトンは力強き麗質の年若き容姿を愛し讚嘆せり、彼は、人間の永久のイデエーは身体の美となりて人の眼に現るゝものなりとの説によりて、彼の感情を自己の前に辯護せり、人間のイデエーに従へば人間は理性に支配せらるゝ生物なり、而して吾人は、若し愛についてのプラトンの説を理解せんと欲せば、ギリシヤ人にとりては美しき身体は第一に總ての筋肉の平等なる發達によりて現れし事を忘るべからず、人はかゝる身体に於てその身体は意志の目的に容易に自由に従ふものなる事を看る、其故にギリシヤ人の美なる身体には理性的精神が身体の諸部分を支配せる事現れ居るなり、トルコ人の如き人民が婦人に付いて肥滿せる身体の生氣なき肉質を愛するは、賤しき性質の標徴なり。

眞實の愛は、其愛が愛せらるゝ者の中に眞の價值を求むるを充分自覺せざる時にても、此の價

値を求めんとするなり、此の事よりして愛には肉慾所有は最上の物なる能はざる事起る、然れども肉慾的所有を單に制するはそれのみにては愛の價値を決して完成せずして、人が己自身並に愛人に於て、より高尚なる物を作らんと試みる中に眞の愛は現るゝなり。プラトンの愛はされば愛人に於て圓滿の備へられたるを見且つ己自身並に愛せらるゝ者の爲に此の圓滿の統治完成をつとむるなり、然れども總ての個々の品物及び人間は彼等の圓滿を實に唯イデエンより得るものなる故に、眞の愛は身体より精神へ精神よりイデエンへ移る、プラトンは愛する人が愛せらるゝ人を愛するが如き熱心を以て眞理を愛せり、プラトン並にソクラテスにとつて總ての事を支配せる智識に對する努力中に、烈しき愛は存せり。

明るい硝子窓を透して

—— 迷 花 生 ——

謹んで此の小篇を畏友荒木秀雄兄に捧ぐ

僕が常に愛讀してゐる「我觀錄」と云ふ書籍に次の事が書いてある。

「執著はすべて惡也。善にすらも執著するは惡也何となれば所謂善は多く相對善なるが故に一善に執著する結果は大善をおろそかにする弊を來す眞に執著の是とすべきは唯一絶對善に對する執著あるのみ然れども此唯一の執著を操つて迷はざらん爲めには他の一切執著をすてざるべからずこれ禪儒の心を雜慮に沒せずして誠一を守り空々を執れといふ所以也。禪儒は少くとも唯一絶對の爲めに小善に對する執著を去るべきを教ふ是れ其取るべき點也。されど件の唯一絶對善の何物なるかは彼等未だ明白にせず彼等は無執著融會無碍もしくは意識の集中其者を唯一絶對善と見做さんとする傾きあり」と。

僕は是れを讀んで平素の考へと暗合する點が多いので喜悅の情を禁ずる事が出来なかつた。

成る程執著といふ言葉は僕に取つてはあまりに善い感じを與へないのである。と云ふのは此の字が僕に與へる印象は或る一つのものに停滯してゐるといふ事である。

即ち進歩發展といふ事は此の二字のうちから見出す事が難いのである。進歩を見出すことの出來ないものには前途に希望がない。従つて價値は無いのである。

又一方から考へて見ると進歩のないものでも一つ所に永く停滯してゐるものではない。必ず退

歩するものである。すべて事物は進歩かさもなければ退歩か常に孰れかに流轉して居るものである。即ち實在は流轉するといふ言は實に人を偽はらざる至言である。

だから執著のみに隨喜の眼を以て見てゐると知らざる裡に意外なる退歩を來すのである。氣が付く時には殆ど取り返しつけない程後退してゐるといふ椿事の起る事が往々あるのである。

だから僕は善事に執著することでもあまり感心を表せないものである。況んや惡事に執著する等といふ事は云ふも野暴の骨頂である。

といつて僕は執著を全然排斥しやうとするものではない。否考へやうによつては仲々有用なのである。

今迄のはあまりに字句に拘泥してそれから直覺した感じを述べたからこんな結論に達したのである。今度は方面を變へて述べて見やう。人には多くの執著心がある。そのうちで尤も強烈なのは生の執著心である。此のために人間には多くの悲劇が起つたり或は淺ましい野獸性を發揮するのである。學生時代の美はしい高貴な理想の光りも醜惡な殘酷な現實の力のために消滅するのを餘義なくされるのである。

是れは一つに生の執著心がその満足を強要する結果である。

恐しくもあり又呪ふべきものは生の執著力ではないか。

では一体どうしてこんな執著心が人間に内在してゐるのであらうか。

これは一應考へる價值のある問題である。否看過すべき問題ではない。

人はこれを先天的であるといつて説明すべきものではないといつてゐる。

果してさうであらうか。僕はさうであらうとは考へられない。

僕は價值のないものゝ存在を神は此の世に許容し給はずと言つた。

ウエブスターの言を想起せざるを得ない。僕はこの生の執著力にも有用な意義があると思ふ。

即ち此の生の執著力が人間の存在の意義と密接な關係があると思ふのである。否それどころか此の生の執著力を解釋することが即ち人間の意義及び價值を定めることゝなることは僕の疑はざる所である。

然らばこの生の執著力の解釋は何んであらうか。遺憾ながら説明を下すことが僕には出來ない。他日にゆづらなければならぬ。

さてかく考へて見ると執著も萬更すてたものではなくるのである。前の場合と後の場合との感じの差異はどうして起つたのであらう。前の場合の時には執著を研究の對象としたのである。だからあまり興が深くなくなつてきたのである。深い意味の存在を認識する事が出來なくなつたのである。字句にあまり拘泥する者は往々此の弊に陥つて失望したり輕侮の念を發したりするのである。其れがちがつて後者の場合には執著を他の研究物の過程と見做したのである即ち目的ととらずに手段としたのである。だから研究の對象物が明白となればなる程その手段との關係が明白となり従つて手段そのものゝ價值を見出してゐる。だからその手段の偉大を知るに至るのである。

是れだけのことを見ても人は物の表面をのみみてその價值を是非すべきものではない。表面の華美に眩惑して讚美者となつたり渴仰者となつたり表面のみすばらしさを見てそのものゝ價值を否定したりすることは往々あるのである。虚榮心の存在はこの一事を證明して餘りあるではないか。僕等は宜しく内容の充實せるものをとらなければならぬ。そこに人たる價值が生ずるのである。

物を皮相的に觀察して是非を批評するのは凡人の通弊である。僕も此の弊があるので今迄幾度失敗して後悔したか知れないのである。書物を讀んでもとかく字句に拘泥し勝ちで字句によつて自己の解釋を専らにして著者の眞意を尙弊履の如く捨てゝ顧慮しない徒輩は皆此の弊に陥つたのである。

此の弊に陥つたものゝ表象は早呑込みである。早合點である。だから完全な事が出来やう筈がない。失敗だらけであることは當然な結果である。すべての喧嘩、不和、誤解等は皆此の惡弊から胚胎するのが常例である。「楯の両面を見よ」の諺は僕等に痛切に皮相的觀察の禁止を請求してゐるではないか。

トルストイはその著「人生論」のうちに科學者の人生觀を次の如く述べてゐる。

「生とは一つの生物が生れてから死ぬる迄の間に起ることの凡てである、一人の人間一匹の犬一頭の馬が生れる。何れも特殊な肉體を持つて居る。そしてその特殊な肉體が生活してやがて死ぬ

る。肉體が分解して他の存在物に變る。そして再び元の通りになることはない。生が存在してゐた。そしてそれが終つた心臟が鼓動し肺臟が呼吸し肉體が分解しないで居るこれが人間犬馬の生きて居ることである。心臟の鼓動が止まり呼吸が止まり肉體が分解し初める。それが死である。ここにはもう生はない生とは出生から死亡迄の間に横はる人間及び動物の肉體的の過程である。これ位明かなことがあらうか」と。

又「吾々は意識の中の生命を定義することは出来ない。それを吾々の中に見やうとする時に吾等は邪道に入つて了ふ。あの幸福の概念だとか吾々の意識の中に吾々の生命を形造るものに對する憧憬だとか云ふものは凡て偽られたる幻影であつてそんな意識の中に生命を理解することは出来ない。生を理解するためには物質の運動としてのその發顯を觀察すればよいのである。吾々は唯此の觀察とそれから出て來る法則とに依てのみ生命そのものゝ法則と人生の法則とを發見することが出来る」と。

彼等は只人間を動物的存在物理的法則の有機物とかしきや見てゐないのである。若し此れが眞實であるとするならば生と云ふものは詰らないものではないか。そんなものに執著する必要はないのである。

なんと云ふ皮相な觀察だらう。此の一事を見ても如何に皮相な觀察が詰らないものであるか又は少なからず惡感化を世に及ぼすことが了解するであらう。返す返すも皮相の二字は賢人の立志の辭書の内より排斥すべきものではないか。

僕はいつか韓非子のうちに次の一篇を讀んだ事がある。

「客有爲齊王書者。齊王問曰。書孰最難者。曰犬馬難。孰易者。曰鬼魅最易。夫犬馬人所知也。且暮罄於前。不可類之故難。鬼神無形者不罄於前。故易之也」

僕はこれを讀んで此の書工は凡人でないことを感じた。

僕は茲に斷言する。

平凡なことはその實尤も價值のあるものであり尤も複雑したものであり尤も人に知られてゐないものである。

この事を云ふと人は奇妙に思ふかも知れない。笑ふかも知れない。

而し僕はその眞理を疑はないものである。

第一に平凡なものは反て人に知られてゐないのである。

手近な例をとると學校の行き返りに通る町は常に一定してゐる。眼をつぶつても往來が出来る位に熟達してゐる。だからその町の店などは暗記してゐる筈である。否全部暗記してゐる。だけでもその家の一軒が他に轉宅したと假定してみる。そうするとその轉宅した店が何んであつたかを想起することは困難である、特別な關係は例外とすれば想起することの出来ないのが通例である又よしや想起することが出来たとしても永い時間を要するのである。このことは僕が中學校に通つて居た時の經驗で誰れも似た經驗があらうと思ふ。僕はその當時此の經驗をすることに自分

の平凡に對する不注意を後悔したのである。いくど冷汗三斗の思をしたか知れない位であるその外教場の窓の數とか同級生の數とかは忘れがちである。これは一方では平凡をあまりに見なれたためにそれを蔑視するためでこんな結果が起るのである。實に不注意がこの禍をなしてゐるのである彼の米國の發明王エヂソン氏が人の問に答へて云ふには

「自分が發明の出來たのは全く只注意力の集中の結果である」といつたのは僕等の大なる戒となる言葉と思ふ。

次に平凡は困難なものであり複雑したものである。

これは一見矛盾の様に見えるけれども決して左様ではない。

その證據として平凡な事物に對する定義や説明に對して學者は頭腦を悩ましてゐるのである。説明のつかないものもあるし。よしやついたにしても多くのよりむづかしい實語を用ゐて僅かにその欠を満してゐるのである。是れを見ても平凡は複雑したものと云はねばならぬ。

今一例をあげて見やうか白色が平凡な色であることは誰れも首肯するであらう。而しその白色を分析して見ると七色になることは七色版の急激な回轉によつて實驗することが出来る。

諺の如きも其れである。あまりに人口に膾炙した結果人はそれに注意を拂はずに口走つてゐる。而しよく吟味すると仲々味が出て來るのである。多くの複雑した眞理を巧に數言のうちに含ましである。古代に遡るに従つて多分諺の數も多くなるに違ひない。それが時代の變遷に従つて不適當なるものは自然淘汰となつて善いものゝみが残つて來たのである。だから今日の諺は今迄の多

くの諺の中の粹中の粹と云つても不可ではないのである。従つてその含蓄も深いわけである。次に平凡は尊重すべきものである。

「下士は道を聞くと大いに笑ふ」と言ふ事がある。是れは下士は物の道理の了解することの出来ない徒輩であるから尊い教の道を説示しても効果がない又何等の感動を與へない只冷笑を以つて報ゐられるといふ下士の濟度し難きを述ぶるものとして解釋されてをる。

僕は此の言葉を次の如く解釋したい。此の解釋は人によつては牽強附會の非難を放つかも知れないが少くとも僕一人は一理ある解釋だと信する者である。即ち平凡の尊重すべきことの裏書きとして此の言葉を用ひたのである。

一体下士は學者を尊敬するものである。その教へは神聖犯すべからずといふ感念がある。而るにその教へはそんな高尚なものでなく卑近なものである。下士にも一見平凡だといふ感じが起る位である。

だから無智な下士は大いに笑ふのである。かくの如く僕は解釋したい。葉根譚といふ書に次の如く書いてある。

「醜肥辛甘は眞味にあらず、眞味はただ之れ淡神奇卓異は至人に非ず至人はたゞ之れ常」と矢張り平凡を賞揚してある。

最近の誰れかの著書に「道は近きにあり」といふ書がある。これも平凡の内に道があるといふ事を暗示したものであるまいか。

以上僕は平凡を三方面から述べた。尙ほ多くの美點もあらうが僕の考へついた點々は是れだけである。

「我觀錄」に次の事が書いてある。

「自然に生命ありやといふ問題は吾人が自然に對して生命を感ずといふ主觀的事實によりて始めて解釋せらる。即ち自然に生命ありといふことはつまり自然に生命ありと感ずといふ主觀的事實によりて始めて解釋せらる。即ち自然に生命ありといふことはつまり自然に生命ありと感ずといふ事に外ならず。かゝる感もしくは味^〇を外にしては自然に生命ありや否やの問題は到底解けざるなり何となれば生命などいふものは知識をもて知り得らるべきものにあらずして唯我が意識上の感もしくは味^〇ひによりてのみ知り得らるべきものなれば也。林檎は旨しといふことも單に知識のみよりいへば何の事とも分らざる立言なり。如何に化學的分析を施すとも旨しといふ一種の性質は發見し得られざるなり」と。

人は味ふといふ境に到達しなければ眞に理解、記憶したとはいはれないのである。見る、知る、認めるだけでは眞に自己のものとなることは出来ない、此の境に居て物を記憶したと思ふのは單に幻影に過ぎない。其の證據として暫時たてば忘却の手によつて完全に拂拭し去られてゐるのに氣が付くであらう。是れは初めから記憶したのでないからである。「眞に記憶せるものは終世忘れらるものにあらず」とは中學校の先生が僕に與へられた教へである。味ふと云ふ域まで達すれば完

全に記憶が出来強烈に印象することが出来る。一生涯忘れる筈がない。面白い事、楽しい事がないつまでも忘れられないのはその意識が味ふといふ域まで達せられたからである。僕等は何事にも味ふといふ域まで達したいものである。味ふには徹底といふ影がある。其所に價值がある。讀書するにしても眼光紙背に徹すといふ読み方をしたいものである。生を味ふ何といふなつかしい言葉だらう。僕は終生味ひを求めやう。

人には餘裕がありがたいものである。餘裕のある人は何所となくのんびりとしてゐて屈託のない顔をしてゐる。なつかしい慕しい人は皆此の種に屬してゐる。餘裕のない人は常に齷齪として日もこれ足らずとして日夜奔走してゐる。輕卒であつて落着がない。人に足元ばかり見られる損な人である。その成績から云へば餘裕のある人の仕事の半分も出来ないものである。學者は多く後者に屬してゐる。自分の専門のみ熱中して餘裕を示してゐないのである。常に事物を學究的に取扱はんとしてゐる。そのために滑稽な事が起るのである。

餘裕のある人の例を一つ示さう。

大石良雄が百難に屈せず人に知らぬ餘裕ありしことは左の片簡が證明して餘りがある。前畧二月前に供頭を以て申附け置たる大手前右手櫓前の都合三本の松の真中なるもの枝振長く延びて見苦しく至急手入致すべき事何故今日まで延引致候哉昨日登城の折不圖目につき驚き入候早速手入致すべく決して等閑に致置候ては不相成此旨屹度頼み入候尙與書院の庭の掃除行届

き居らず明朝矢作ものまで早速手入れ致すべく此段屹度頼入候右○○○○より申付べきなれども至急の事ゆゑ斯く此方より申送り候

なほ今日暮方までに人夫二人此方屋敷まで送り呉れらるべく此又頼入候。

三月十九日朝

良

雄

六 助 爺

尙々例の鉢手に入り候哉もし見つかり手元にあれば早速持参すべく此方留守なりとも奥にて貴殿の好物なる××茶褒美に振まひ申すべく候。

何の事もなき至極平和な書簡であるが此日附によれば江戸に於ける淺野侯の變事の急飛脚が赤穂に着いたのは三月十八日午後十時であるから赤穂の城中は鼎の沸くが如くの大紛擾を極めて居た事は明かである。而して六助爺への書簡は十九日の朝とある、如何して松の手入や庭の掃除ごころの事か此中に於て斯の如き平和の書簡を記し得る流石は稀世の大英雄である。良雄の高風欽すべきではないか。

かゝる高風は勿論一朝一夕で出来るものでない。多年の修養の結果である。僕等は一步一步かかる難局に當つて餘裕綽々たる態度をこれるやう修養の道程をふんで行きたいものである。(大正四年三月七日)

小林恭太郎君へ

永井志津香

(四五)

小林君足下、君と能登から歸つたのは、花の蕾のまだ堅い頃でしたが、今では櫻も散つて青葉の香りがむせ返る程空一杯に漂つてゐますネ。此の新緑の陰の校門を、去つてゆく日が近くなりました。鳴かず飛ばすの三年は旅の一夜の宿よりも短く思はれますが、其の間に遭つた幾百の人幾十の友の内、君の印象が甚だ濃く残つてゐる事を先づ告げます。然し其の理由は分らぬ、君の個性が明確な爲めなのか？君と最も親しかつたからか？恐らくは、つまらぬ私の書いたものでも常に思ひ切つて評してくれたからでせう、其の御禮旁々亦甘じて酷評を受けるために筆を執りました。

小林君足下、私は今に初めぬ事ながら最初ファーストグリンプスの瞥見の力強い事を感じます。金澤の地に來て第一に、同じ屋根の下、同じ釜の飯を食つて暮した人は口に云へぬ親しみがあります。

或人の云つたやうに、第一の印象は其の物の真髓を捉ふるに近い、途中幾多の變遷はあつても最後に得る斷案は最初の印象の敷衍に過ぎぬとは眞實です。

私は直覺萬能論者ではないが、直覺を判斷の顧問官として重なるものです。大抵の人は最初の一瞥に内心の或物を對手に曝露してゐる事を切實に感じます。

創作の原動力も發明及び發見の發端も多くの研究の動機も此の最初瞥見の直觀を外にしてはなにかとさへ思ひます。

對象物と自己との發する繊細な二の線がピタリと觸れたときに、偉大な結果を齎らす種子は蒔かれるかのやうに思はれます。

最初にして得た君なる印象と今得てるそれとは大して差のない事を告白します。

小林君足下、此の地を舞臺として君を最も強く僕の胸に刻印する一景を描かしめよ。

人知れぬ内に書かれた、出師表式の建白書(?)を事務室へ出して容れられずんば去る、と云つて八時幾分の汽車を待ち乍ら北寮の窓で語つたあの晩です。君の眼にも残つて居ませう、荒れ狂つた吹雪が鎮まつた後でした。城壁の石は夜目にもしるく龜甲形に割かれ、足跡一つない運動場に青白い月光が梅の樹の影を鮮明に投げつけ、城から尾山神社への森は白かすりのやうに淡く烟つて、其の背後には町の灯がぼうと夜明けのやうに見えて居ました。思ひ出したやうに時々鳥がカツカツと鳴く外には何の物音もせぬやうな静かな宵でした。其の頃にはさして珍らしくもないその夜の景が二時間の後には別れると云ふ思で潑瀾たる生命を持つてゐました。君の獨立的な實行力に初めて覺えた愉快な共鳴と、事情を知つては留めにくいながらも何んだか去せたくない情とが、無言で立つてゐた私の胸を、縛つたり繹いたり、括つたり放したりしてゐました。

秋の樹を思はせる君の風貌には意志の鋭い影を認めました。

小林君足下、君は多分忘れて居ませうが、去年の今頃あの落つきのある而かも若々しい紺青色の壁に圍まれた君の書齋で話してゐたとき、君は一友の破約を憤つてゐられたのを私は今に覺えてゐます。君が怒つてゐるのを見たのは其の時だけでした。事の内容は大したものでもありません

(四五)

でしたが、純な心には許し難い事です。私は其の時君の心が透明なのをしみじみ嬉しく思ひました。

歳毎に経験の増すに従つて「此れは世間にありふれた事だ」と極めてしまふ人を私は喜びません。私達は何時まで「うぶ」でありたい。「すれる」のは心から悪くむ。たとひ如何程経験を積まうとも。美しい人を見て顔を赤らめるあの純潔な心がなくて、どうして敬虔の念が起らうかと思ひます。

小林君足下、私は君が常に何にか知ら思索に耽つて孤獨を味つてゐられる態度を甚だ尊敬してゐます。又君が廣坂の裏通りからあの藪の坂道を下りて里見町の私の下宿へ頻繁に來られたとき以來、君が齎らす内外の新事實や諸大家の言説や君が思想の片々は、私の心の空所を埋めたり刺戟したりして呉れた事を大に感謝します。而かも亦君と私の物の見方に相違のあるのを面白く思ひます。例へば一の蕾が開くのを見て君は「開發力が宇宙の壓迫を打破つた」と云ひませう、私は僅に「氣温が花を爍つた」とでも云ひませう。

小林君足下、私が曾て君は法科に適するか知らと云つたので、君は可成り考へられたさうですが、私は依然そう云ひたい。君は實行の人たるよりも思索の人ぢやないかと思ひます。敢て君が進まんとする道を阻む心はないけれど、今少し愚見を以て君の心を動搖させて見たい。私如き淺見な者に揺すられる程弱い欲求を以て目的に進まれるのは君の爲めに取らぬ所。食ふなど云はれたものは食ひたいものです。道にある敵を打ち破つてこそ前途への力強い行進が出来る。其の堂

堂たる進軍の武者振りを見んとして今一度申します、「君に法科は適するか知らん」。

敢てピンピン飛び廻る實行家は求めぬ、輕薄な實行家はいやになる程あるから。實行力のみが政治家の要素だとも云はぬ、慮る事淺い法家は空文の番人にすぎぬから。私は日頃三つの分銅を持つて人を量る。深慮なきものは下、思つて行はざるは中、思つて而かも行ふものを上としてゐる。よく君と話す事だが、不言實行もいゝが、多言多行を其の上に置きたいと思ひます。多くの人が不言を不實行のよい隠れ家にしてゐる毎に私は唾棄したく感じます。寡言黙考の君に對して多辯は要求しないが、唯だ此の上にも實行力を延ばされん事を望みます。此は無い物を望むのではなく、温室の花を外氣の下へ出し給へと云ふに過ぎぬ事です。

小林君足下、近頃の若い人々の一部には科學を輕視する傾向が湧いてはゐないかと思ひます。思索を重んずる反面には空論と云ふ陥穽がある。科學萬能に倦いた人々は瞑想を重んじ出し、進化論の缺点を並べて哲學の幕をくゞらうとする人々は數理的觀念が薄くなりかゝつてはしないかと思ひます。

宗教家殊に禪家は、人の智慮は淺薄なものはない、物其物を見ずして其の影を見てゐる、科學は要するに卑近なる生活の杖であるかのやうに云ふ。私も禪的に物其物の眞髓を捉えんとする欲求を十分に持つてゐますが、同時に、人智に依て造り上げた科學を極度まで驅使して見たいと思ひます。解釋し盡されぬ障壁に衝き當つて、深い悶に陥り、汗と血を絞つて更に一步を加へてこそ、前代の人より譲られし人智の結晶をより大にしより光輝あらしむるものではないでせうか。

名を直観に借り、哲理に口實を求めて徒らに四捨五入を行ふ事を私は嫌ふ。大言壯語は啞者ならぬ者なら誰人にも出来ませんが眞の勇氣は緻密なる計劃を立て、後に起る。偉人は道德を破ると云つて破壊を重んずるのは愚の骨頂。止むに止まれぬ深い強い内心の欲求に驅られての破壊こそ眞に建設の基礎となる。人智の判断の及ばぬ点まで押し進んでの一六勝負は眞個の痛快事。現代科學の行きづまりを見ずして既に輕視の傾向あれば其は尙早です。

君のよく口にする茅原華山氏も「日本の青年ほど數理的觀念に乏しいものはない」と云つたそうです。其の征矢に射られる人の多いのを悲しみます。

近頃夫妻とも名のある或る文士が選舉候補に立つたとき、其の夫人の言として「此頃私はロマンチックな詩作よりも實社會の味を浸み浸み味ひたいと思つて、私達は政治と云ふものに研究の眼を注いでゐます」と新聞に見えてゐた。私も今そんな氣分になつてゐます。ロマンチックの美を無視はせぬが實社會の事々物々を此の眼此の手に觸れさせて見たいのです。人の評論も讀みませんが、單なる参考としてです。鈍くても淺くとも此の力自分の力で解釋しやう批判しやう打衝かつて見やうとしてゐます。霞を隔て、物を見たくない、赤裸の相を見たい。早く既成の科學を我物として、新しい開拓の一步を進めたいと思つてゐます。

踏みしめ踏みしめ登りゆく梯子の途中で、雲のために最早や進めぬ羽目になつてこそ、宗教に對する眞の渴仰を感じませう、心から哲學的思索に入れませう、若し亦更に一步を加へたときに、後代人に譲り渡す遺産に光が添ひませう。

小林君足下、終りに臨み、共に善光寺に詣り、伊香保に遊び、能登半島を廻つた君と更に南洋へ行を同うする事が出来るのを喜びます。今後其時までの腦裏の産物を大きな海の眞中で交換しませう。(四・五・九)

嵐を前にして——水上 茂

(五〇)

曙は夜を破り 太陽は照れども

淋しみに流るゝ人間の苦しい涙を消し去らうとはしない

あゝ君達よ

自分で自分を救ふことを知らない君達よ

遂ひに世界はみんな孤獨に生かされてる

比べものゝない自然までが寂寥に面を伏せて見える

あゝ かくも擴大な自然はたつた一人の愛にも飢えるのである

僕達一人の愛にも飢えてるのである

あゝ 黙々として聲なき自然よ

ぼくはいまあなたの限りない愛がよくわかる氣がします

黙つておいでのあなたは好んで冷たい沈黙をつゞけて居られるのではない

この世界の人間がみんながみんな苦しみの涙を流すとき

あなたの眼にも涙があふれ

忍従のうちに忍び泣きして居られる

あゝ ぼくはいまあなたかその限りない愛の前に跪かずに居られないのです

堪らない感恩の涙に跪くのです

あゝ 自然は渾てのものを抱き私をも抱いて居る

自然はいつもみんなにその限りない愛を呉れ

淨い涙で人間のこゝろを洗い清めたいのだ

あゝ すべてのものを抱かれるあなたの苦難の涙よ

あなたはすべてのものを抱いて居られる

それだけあなたの受胎の苦しみは烈しいのだ

あゝ ぼくはいまあなたの苦難の涙がひし／＼と身にこたねるのである

すべての重い責任を永遠に荷ふて居られるあなたを思ふ時

僕達の責任を身に泌みて感ずるのです

あゝ 限りない自然よ

私が必要である限り私は生きるだけ生きようと思ひます

そしてあなたの苦しい涙で自分の心を洗ひ浄め

洗ひ浄めて人間の苦しみを消し去らうとする

あゝ 君達よ

(五十一)

ぼくはいまひどく苦しがつてる
無意識のうちに充實を追ひ求めて苦んでる
寂しきと苦しきはぼくをかこみ恐ろしく僕の一生を不安にする
あゝ しかし淋しくとも苦しくとも
遂ひに恵まれてる僕であり選ばれたぼくの一生である
このことを思ふとき僕のそうぼうに涙流れ
感恩のこゝろに祈るのである
あゝ 僕の一生は孤獨でも僕ひとりの一生ではない
少数につながる僕の一生は淋しくとも
少数につながる僕の仕事はついに悲壯でも
僕の心の光耀は自から輝き照り
寂しい人間は温められ
苦しい人間は慰められ
眞面目な人間は力を與へられるだらう
このことを平氣で云へる今の自分が恐ろしい
しかし自分はやがて動き出す
そして人間の意志の恐ろしい眞面目さをつくし

もつとも深い人間の責任を生きて死ぬだらう
あゝ 僕の一生をしてたゞ滅ぶることなからしめよ
それがためにごんな苦しみも僕は忍ぼうとする
涙を一杯にためながら
あなたの御心に従つて衝き進むでしよう
あゝ 僕のいま欲するものは光でもない
歡喜でもないまた幸福でもない
たゞ自分の道に苦んで止まない本能と
人間の不眞面目に流す涙である

あゝ 中心の睡れる人々よ
君達の世界は深く閉ぢられ
限りなき自由の翼は失はれて喘がうともしない
あゝ 君達よ
限りなき蒼空に自由はひそみ
幸福の鳥は悦びの歌を歌ふ
あゝ 私の欲しいのは自由に飛べる翼である

飛ぶところに飛べる自由の翼である

あゝ 限りなき空よ

飛ぶものにあたへられたる限りなき空よ

あゝ 僕はもつと自由に歩みたいのだ

動くところに動きたいのだ

今の私の心は網に包まれ

一步ごとに網目につかる

この馬鹿な自分に口惜し涙を流しながらし

潜りぬけ飛び超え私は自由な道に憧がれてる

あゝ しかし君達よ

何時までも何時までも僕は馬鹿ではない

今年十二月自分は五百乃至千行の詩をかく

書かずに居られずにかく

自分の生きた二十二年のすべてを

ぶちこみぶち込み

自然に一步深く喰ひ込んで見せる

僕の新しい發生はこゝに展かれ

僕のほんとの一步がこゝに踏み出される

あゝ 今内に力を蓄へて居ればよい

やがて僕のくらべものゝない單純な心は

さらに透明となり更に無意識となる

かくて内から自由なものに觸れ

歩まずに居られない一步を踏み出す

あゝ 自然は自から運命を切りひらくものを祝福する

未來はくはきつと日本にない深いものが歌いたいのだ。

常に充實を求めて止まざる本能は今僕にある落付きを感じさして

僕は遂ひに自然に祝福されずに死ぬ人間ではない

君達よ

僕の大膽な言葉を疑ふなら疑ふがよい

僕は遂ひにたゞ生かされてる人間ではないのである

生長と云ふことのない君達は今にきつと恐ろしがる

きつと僕を恐ろしがる、

あゝ 内に自分の世界を持つた少数の天才よ

自然に根を持つ第一流の人間よ

君達は人類の光であり誇である

君達のあることは正しき人の道を照らす光であり

弱い人間の力である

僕は今君達とのみ心の底から手が握られる

君達の個性は孤獨を握り自然の愛に飢へてる

而して君達の孤獨は絶対の孤獨

君達の孤獨は萬人のこゝろにすむ孤獨

あゝ 人類の意志の戦に參與する眞の勇者よ

すべてのものゝ存在に嚴肅さを感じる眞の人間よ

君は遂ひに萬象の存在に深い意味を感じてる

君達の肯定は君達の前進

君達の前進は自然の深い責任と苦しい努力の涙に濡れて居る

あゝ 自からの存在の價値を疑ふものこそ眞の賤民である

自分は遂ひに前進の苦しい本能より知ることがないのだ

あゝ ぼくは今限りなく歩む

自然を愛し自分を愛し

遍く私の世界を擴し展げおし展げ

孤獨にして萬人の往む道を歩む

あゝ 淋しい孤獨の人々よ

ぼくはいま君達に限りない愛を感じてる

失望するなかれわが同胞よ

寂寥と苦痛が君をとりかこむとき

面を伏せてその淋しい涙を流せよ

吾等が心の奥底に湧き立ち溢れ動く生命の流れは

孤獨の人に依つてのみつかまえられる

眞に孤獨の人こそ

萬人の心に入り 自然の愛に觸れる

あゝ 淋しけれど自分を育て育つる苦痛こそ

比べものなき吾等の誇り

地上に輝き照る光榮はなくとも

吾が道に光りあり

永遠に互りて消えざる光あり

(五八)

あゝ すべてを生みの母なるあなたよ

恐ろしい痛苦にうなだれ歩むわが道は孤獨なれど

吾がうちに燃ゆる愛の炬火あり

吾がこゝろは萬人のこゝろにつながる

あゝ かくも自分は渾ての人に無頓着で居られないのだ

しかし私のさしのべた腕は涙を知らない人に依りて握られ

吾等が嚴かな存在に對する盲目の人に依りて瀆さる

あゝ しかし僕はいま

不眞面目なこゝろを見るに堪えない

淋しい人を見ることは其にもまして堪らないのである

あゝ 自然よ

私はいつまでもいつまでも黙つてみんなの苦しみみんなの寂しみを見過さなければならぬの
でしようか

私は遂ひにそれほど無力に生かされた人間なのでしようか

あゝ しかし自分の未來を想ふとき

悦びに胸躍り

いふを知らざるに感恩に涙流る

あゝ 未來、自分は内より光に照らされて白光となり

白光に照るわたしのこゝろは輝かに照り

人間の暗き心の闇を破る

あゝ わが道に光あり

吾が道を切り開ききりひらく悦びは

くらべものなき吾が一生の誇り

狂氣のごとく刹那の充溢を求むる痛苦はあれど

悲痛に涙あれど

僕の自意識は遂ひに比べものなき幸福に浸る

あゝ 僕は遂ひにたゞで死ぬる人間ではないのだ

僕は終いに天才にならずに居られないのだ

あゝ 苦しみよ 淋しみよ

今 自分は君達を恐れないのだ

未來に輝く光耀にはげまされはげまされ

(五九)

吾が道を歩む

限りなく吾が道を歩む

(六〇)

あゝ 私はいま君達の知らない世界を感じてる

私のこゝろは澄み

私の心は無垢の愛に包まれ

限りない光耀に悦びの聲を擧げんとす

あゝ 黙々として云ふを知らざるこの感激よ

溢れては湧く光りの波よ

言葉うしなひ我は祈る

あゝ あまりの悦びに涙が流れる

あゝ 私は幸福なのだ

あゝ 君達よ 我が同胞よ

悦びは君達の内に秘む

流れて止まない光りの波が

ゆらりゆらりと君達のうちを流れてる

あゝ 自然はそれほど奥底の知れない海だ

あゝ かくも擴大な自然は

なほ淋しい悲しい人間に愛憐の涙を流してるのである

思へば世界はみんな抱かれる胸に憧がれて居る

あゝ 君達よ。わが友よ

この擴大なる自然の恩寵に跪けよ

而して限りなき生命の流れに生きよ

あなたに抱かれることは既に人間の新しい發生である

こゝに寂寞を破る光りは溢れ

曠劫の闇はひらかる

あゝ 光明遍照の世界に

樹々は穩やかに目醒め

生々たる芽は朝日子に輝き渡る

あゝ 輝く榮光よ

人類の復活よ

大正四・五・二六

(六一)

むぐらもちは

地つちの中から

むつくり頭をもたげた

麗らかな朝の光は

やわらかく、もりあげられ土の上に

新緑の芳烈な木の香を撒いてゐた、

むぐらもちはそろ／＼と自分の住んでた真闇の世界がいやになつた

夢ごちちには彼は初めて見た明るい世界を歩きまわつた

光の波はいたるところに瀾漫し

生命の泉は紺青の叢に絶えず涌き上つてた

彼は新らしく發見した美はしい自然に見とれた

日光は彼の體をつゝみ全く光るものにしてしまつた

歩みつかれはてはまぶしくなり

彼は以前の穴に首をつきこんだ

しかし濕つばい闇黒にたえられず直に首をひきぬいてしまつた

彼は自分の同族のものゝ愚を笑つた

彼は到頭太陽の下に住む動物になつてしまつた

彼は永く太陽の直射をうけびり／＼と強烈な麻痺と昏倒を覺えた

彼は數時間叢にちぢこみ

寶玉の如き露滴に甦り自然の愛としたしみとを讚美した

彼は自分を考へ自分の生命を考へ自分天職を考へた

さうして彼は自己の生存の嚴肅を考へた

彼は考へなければならなかつたのである

それは彼の天命であつた

彼は今までの生活がくやしくなり

過ぎ去つた自分の生命の行程を奪ひかへしたいと思つた

かくして彼は一歩づゝ自然に食ひ込んで行くやうになつた

彼はつねに自分の自然に對する食ひ込み方の足らぬをなげいた

彼のあらゆる瞬間に生きゝらんとする努力は決してやむ時を知らない

彼は自然の根にまで食ひ込まなければならんと思つた

大海の潮がつねにしほからい様に自分自身の生命が全く自然でなければならぬと思つた
力そのものでなければならぬと思つた

彼は太陽に照されてのみ光ることを得る自分の身を恥かしく思つた

彼は自分の内部から光らねばならぬと思つた

彼は太陽よりも輝きその光よりも強くそして更に大きくならなければならぬと思つた

彼の心はあせり

彼の光つた耳と灰色の瞳はたえず振動した

彼の苦しみは極度であつた

彼は幾度かさびしさに體をなげだした

彼の體は火の様に熱してた

しかし内部からこみあげてくる悲しさは針の光よりも鋭かつた

彼の神経は眼に見えぬ糸よりも細く絶えざる連続にてふるへてゐた

彼の感覺は如何に小さき衝動にも感電した

彼は原始にあこがれ芽生えを慕つた

もだえにもだえて彼は緑の叢をかけまわり

再び芳烈な木の香の下に體をなげだした

周圍の物象は太陽の光にきら／＼と輝いてた

木の芽は青く光り噴水は白く映じ

土龍どりゅうは太陽に照されてる自分の體の内部に見出した微かなる自發の光を嬉うれしそうにみつめた。

斷章

あゝる人

3

わが魂の

さすらひの歌

聲悲しくも

うちふるひつゝ

風のまに／＼

送られて

やがては遠く

きえてゆくかな。

1

物皆滅ぶか

人も亦亡ぶか

あゝかの星さへも

あゝこの人の心さへも。

2

秋なれば

心の痛み

深みゆく

悲しき風の

吹くまゝに

ハラ／＼と散る涙かな。

4

悲みは

いつも若し

悔も亦

いつも新し

喜びは白髪

驕りは墓守

魂の亡びの道を
きよむるものは

悲みにあらず

又悔にあらず

そは實に

喜びと驕となり。

手は汚れたり
あゝ亦心願も
にがくしく
穢れ去りしか。

5

心願の

旅の途すがら

ふと摘みとりし

赤い花

何げなく

いと何げなく

手にしたれども

色黒き毒汁に

淋しさ

泛舟

じ風吹く

宿もなきさすらひの子の旅の宿夢ひかれゆく

故郷の家

夕陽落ちて汀に立てる我が影の長くうつりぬ
丘の上までも

つくねんと疊にうつる我が影を冷かに見ぬ淋

しさ心

夏が来て強い光に蘇生つたクロロバの葉の淡

き囁き

敗残のやるせなき身を野に投げて悲しき旅を
啣ちて泣きぬ

き囁き

隙間もる火影の搖ぎ物凄く砂まき上げてつむ

き吐息よ

吹き荒ぶ風に折られて靡きやらぬ濃き烟の淡

き吐息よ

ぶなり

雉子鳴く深山の寺に秋暮れて巡禮の笠に霞と

く日の長きかな

心ならずよしなきことに指染めて果敢なく續

淋しさに泣く

我一人世に捨てらるゝ心地して物かなし夜の

堪へかねて淋しき松の影づたひ海を見入りて
泣きし我かな

○ 何となく暗き心にとざされて世捨てし人の身
を羨みて見ぬ

○ 夢さめて轟く胸を我知らず指ふれて見ぬ若き
心に

○ 見返れば足跡長く淋しげに波打ち際の夏の夕
ぐれ

地上哀誦

福光正次

むなしうぞ犀の河原はあきらめのたぎつ涙に
暮れもなやめる
山も樹も汽車もさんらんいつ陽の光りまろ
べる犀の河はも
犀かはのわすれな草のはなたばげ水に浮いた
りきみのしのばゆ
うららららひばりがひとつまたひとつ光に白
しいり陽が青し
飛んでちるきはまりしらすたんぼのうらめ
しさのみきみにしげかる
あはれみがたんぼの實にいだかれぬ観音堂
のみきみならなくに
みつむれば空いつばいのもの憂さがたんぼの
の實に涙ぐまじき

太陽は娘が寡婦かにひ妻かたんぼの實のし
とど濡れぬる
春つかせしばしなんぢのくろかみを五尺ばか
りにゆれくけてけり
いぶかしうたがひの眉のおもみさへなんのね
たみときたまふかな
眞實に悦しきまざるきみが瞳も林檎畑のあか
き夕ぐれ
草も樹もうらはづかしき伏し瞳ぞも俯して仰
げば春日あかより
やへざくら一樹さびたり山はだのだんだら畑
のあをきまつびる
十方のひかりにしろしさくら花やまふごころ
にこの身ゆらげり
ゆふざればかうもりのごど荒いその蟹のさま
して野にくさつめり
あまつかせ能登のみさきをいくめぐり春のも

のうさいふよしもがな
黙ねんと小屋ひとつあるいぶし銀林檎畑の春
の夕ぐれ
夢香山いり陽さすなり三味の音がこのやま越
えてきえゆくごとし

短歌

照

井

春の夜の戯

覆面しピストル持ちて汝がねやに
忍ふ戯れ春の夜短し。
君が手より人形を奪ひ地に投げて
顔踏みにちり急ぎて歸る。
君の留守居人形の首を抜きとりて
いらだつ心静めて歸る。

冬の名残

質入れしマント思ひ旅を思ひ
衢あゆめば散るみぞれ哉
戯れに君を脊負ひて夜の雪を
踏めばサクサク身に染み渡る。

* * * * *

春尚ほ浅し

雪どけの霏深くして見よ山は
夕あかりして笹鳴止まず
日は輝々たり春尚浅し夢香山
枯れし芝生に火をつけてねる。

* * * * *

四高俳句會句鈔

大谷 繞石

夕立晴れ 牧牛總て 樹下に在り
飼うて久しき 河鹿初啼き 夕立晴
點晴に 夕立ちしと 寺寶案内者の
雨浴用意あだなりし 夕立沖過ぎし
葬儀終へての 夕立に故人偲ぶこと
夕立ザバと過ぎて 椰子林又照る日
夕立つ 鳥に遠き帆船 日に照れる
夢心 夕立ちすらしと 寢返りに
神清めの 雨と祭の 朝降るを
入れ毛して 兒の稚兒鬻も 祭の日
此處ら 場末祭の 注連も張る張らず
祭 毎に 血を見る 喧嘩 漁師町
何の小屋と子等たる 祭り前の馬場
祭り 今日 商賈家々 御簾吊るも

(七二)

岩城 孤秋

留守の役 土佐繪に 祭思ふこと
川は舟 舟は人渡御を 待つ 祭
正條に 植うる五反田 夕立てる
夕立雲 流るゝ 暇長に 喘ぐ 牛
比叡は 夕立湖心に 一つ 帆晴るゝ

上村 乙贊堂

御庭開 放人は 皆藤の裏戸より
町に入り 汽車に 藤棚 近く 見て
溪を挾んで 寺對す 崖は 藤垂れて
鳥の木立に 鳴く音か 藤に 月淡き
群羊の 草一里 藤に 小川ある
藤寺の 由縁を 茶店 餅の名に
蝙蝠や 畑に 夜干しの 歪む 竿
蝙蝠を 呼ぶ唄に 子を すすかす 門
樓の 灯や 見返り 柳 蚊喰鳥
鮎汁の 鍋に 夕立の 雲せまる

堰の金魚に 目移す 時夕立 俄かして
皆が祭を 待つ 浦や 鮎の 餌とり 舟
三郷の 競や 祭 飾牛の 數
祭太鼓の 青田道 連れを 待つ 日傘
濱は祭の 山車芝居 舟も 底干して

加藤 琢白

繪染上 藍揉めば 蛇の 鳴き返す
炎上寄進 伐り 株に 齡や 蛇鳴いて
蠶紙賣れば 蛇晴らす 村も 仰々し
摘草は 落馬の 人に 興がりて
舁し 箱の 藁更へば 藤を 投げ 雨や
名にも 怖ちる 池濁り 見ゆ 藤揺れす
親杉は 夜鳴き 宵は 蚊喰鳥
埋地 祭りに 見る 焼け 月や 蚊喰鳥
狗に 由緒ある 堂宇 灯を 蚊喰鳥
蝙蝠の 歌あり 鞍馬 洞 寄りす
女蜂あてし 裏山 雜木 夕立晴れ

染糸は 縫れな 今日の 夕立醒め
何かくす 鳥の 忘れを 原夕立ち
海士のもぐる 見てあり 沖の 夕立霧
潮光りす 鳥賊に 酌む 灯や 磯祭
矛盾解けぬ その 悶えまた 祭立つ
山車見來しが なほ 残る 祭罷り 寝て

口田 無明燐

撮影衆の しゝまを ゆらり 藤垂れて
犬の毛並み 艶かに 照れり 藤垂れて
授戒會は 雨となり けり 藤夕
河原廣々 見上ぐる 崖や 藤垂れて
蚊喰鳥 ひらり 過ぐ 馬醫 迎ふ 灯に
繩飛ぶ 子ら 場末 小路や 蚊喰鳥
蝙蝠を 逐ふ 視線 高臺の 灯へ
彫刀 措かず 神輿に 夕立灯して
掘る土の 香に 媚ぶ 蚯蚓 夕立晴れ
夕立盛るを 焦て ども 夢に 足拗ねて

(七三)

堂の朱に嘯く蜥蜴夕立ち風
久々の上陸足搔ゆき思ひ磯祭
祭ふるまい待つ興鱈穴釣りに
二階掃いて川隔つ祭森晴れに
双樹そゝるに注連結へり祭古式にや

山岸 木魚

草瑞しきを虻群れぬ古沼埋む土に
葉浸す岸に柳虫探すに虻群れて
海見下す軽きめまひや草摘みて

酒井 青螺

山や降らん池光る茶屋に虻群れて
虻鳴くや水跡まざると便り得て
放ち龜に酒施與の喪居を虻鳴いて
狐藪と知る摘草に女客居て
摘み暮れし菜はたゞ黄に霽垂れて
摘み歸る灯の明き町牛ノソと過ぐ
佛具磨けば藤の雨粉の冷々と

倉の隙々帆揺れ見て藤に嘯きぬ
養魚池の草伸びくを藤に來て
蕃地哀歌は蒸す夜の猛き蝙蝠に
下宿紛れも連る蝙蝠の寄席前に
戸繰る二階の額明りして夕立る
御廻廊蛛網大揺れな夕立前の風
祭奇習を言ふ人と蟬の宇治路を
祭り衆と岬八景巡り來て
渡御跡の御砂掃かすよ月うらと
加茂は清水に砂鳴らん祭後の月

雜 錄

發火演習記事

五月十日野外發火演習舉行さる、此朝夜來の
細雨全くやまず浮雲頻りに走る、午前八時集合
喇叭鳴りて尾山城下青葉若葉一齊に搖ぐ、即ち
戎衣に身を固めたる八百の健兒は各部隊に従つ
て整列せり、部署左の如し。

演習總監 高橋 先生

副 官 森 長 四 郎

副 官 竹越虎之助

第一中隊長 大野 先生

第一小隊長 塚田 清 男

第二小隊長 北川 榮 一

第三小隊長 小林 大 乘

第二中隊長 山崎 先生

第一小隊長 有岡政次郎

第二小隊長 高 純 一

第三小隊長 小川 茂 敏

第三中隊長 松本 先生

第一小隊長 寺野 良 一

第二小隊長 豊邊 龍 夫

第三小隊長 早野 參 造

こゝに於て總監の一令下る、全軍校旗に向つ
て捧げ銃をなす、終りて校旗を先頭として第一
中隊より順次校門を出づ、既に市街を離れて北
陸街道を西進す、九時半野々市を去る數町の地
點に休憩、沿道の風物何れも初夏新鮮の色を帯
び快甚し、十時野々市に入る、これより街道と
別れて村路一里額谷村に着す、休憩四十分、晝
食を喫す、此時假設敵軍(約二小隊、小谷先生
指揮)は既に先進して鶴來街道を金澤に進む、

十一時半集合、統監は左の想定を與へらる。

一、南軍混成旅團ハ五月十日午前鶴來附近ノ

戰團ニ於テ勝利ヲ得金澤方面ニ退却スル

敵ヲ追撃シツ、同日午後零時三十分頃旅

團ノ主力ハ野々市南方矢作附近ニ又右側

衛タル學生大隊ハ同時頃額谷附近ニ達ス

而シテ此ノ大隊ハ野村練兵場附近ヲ經テ

菊橋方面ヨリ金澤市ニ進入スヘキ任務ヲ

有ス

銃若干附屬シアリ、

演習ニ關スル敎示

一、敵ハ白帽、

二、赤旗一本ハ歩兵約一中隊、紅白旗一

本ハ歩兵機關銃二銃ヲ標示ス、

三、空包ハ各人百五十發ヲ携帶スルモノ

ト假想シ十發ヲ使用ス可シ、

四、耕作地、庭園ハ凡テ踏ミ入ルベカラ

ザル障物ト假想ス、

此際に於ける敵軍の情況左の如し、

一、敵ノ兵力ハ我ヨリ劣勢ナルモ我ノ急追壓

迫ヲ受クルコトナク退却シツ、アリ、

二、目下北陸街道ヲ南進中ナル敵ノ他ノ一部

隊ハ今十日夕刻頃迄ニハ金澤附近ニ到着

シ得ルノ距離ニアリ、

三、額谷、野村道ヲ退却シツ、アル敵ノ兵力

ハ歩兵三個中隊ヨリ多カラズ、但シ機關

正午を過ぐる三十分、對敵動作に入る、時に

雨全くやみて頗る爽快、即ち第一中隊を先登と

し、第二、第三中隊を本隊として敵を追ひつゝ、

鶴來街道を北進せり、斥候は頻りに敵影を探搜

しつゝ、街道を進む、果して額谷を去る凡そ七八

町の小丘に敵斥候伏在して銃聲初めて響く、敵

は逃れて一部隊は窪村入口により、更に逃れて

窪大橋附近の村落にて射撃したれども我は應せ

ず、即ち敵は益々退却して街道を離れ出村を經

て野村練兵場西端に屯したり、然して我は之を

包圍せんと同一の道路を追撃し、野村練兵場東

端に達するや第一中隊は右翼に、第二中隊は中

央に、第三中隊は左翼に、練兵場の半面を包圍し

展開せり、時に午後一時半遙に白帽點々として

敵も最後の抵抗を試むと見えたり、やがて五分、

各中隊一齊に火蓋は切られたり、白煙濛々、銃

聲耳を聳す、まづ右翼進み、次に中央進めばや

がて左翼進む、銃聲益々激烈、白帽亂るゝを見

る、一時四十五分全軍に附け劍の令下る、劍光

閃々として殺氣滿つ、五十五分距離凡そ八百米、

一令下つて我は敵を一舉に蹂躪せんと猛烈なる

突貫に入れば、雄々しや敵もこゝを最後と一齊

射撃を試み正に一大修羅場を現さんとしたる時

休戦喇叭は嘯唳として響きぬ、時に二時を過ぐ

る三、四分、即ち更に部隊を列し、人員を檢し、

休憩の令下る、次で統監の講評あり。

集合遅きため出發時間を數分遅らしめたるは

遺憾なり、途次行軍については野々市にて道

路を誤りたるため多少混雜したる外大体可なり、

戰團にうつりてよりは不出來なる點多し、

最後の突貫の如きも統一を缺きたり。

猶其他二三の注意ありて講評終る。

全軍即ち野町往來に出で、菊橋を渡りて三時

半校門に歸れり。

叙任辭令

四月十六日

依願免本官

教授 高橋 郁治

四月二十一日

任第四高等學校敎授

木村 謹治

文部省視學委員ヲ命ス

教授 河合 義文

部 報

英文和譯

- 一等 (無シ)
- 二等 米澤菊二
- 三等 (無シ)



語學部報

本部は事業の一として例に依りて懸賞文を募集することとし、曩に漢文和譯、獨文和譯、英文和譯の三種に分ちて多數會員の多數の投稿を期待したるに、漢文和譯は應募者一名も無く、他の二種も投稿甚だ少なかりしは本部の寔に遺憾とする所なり。今茲に審査の結果を誌上に報告するに當り、次學年度には奮つて盛んに應募せられんことを熱望して已まざるものなり。

獨文和譯

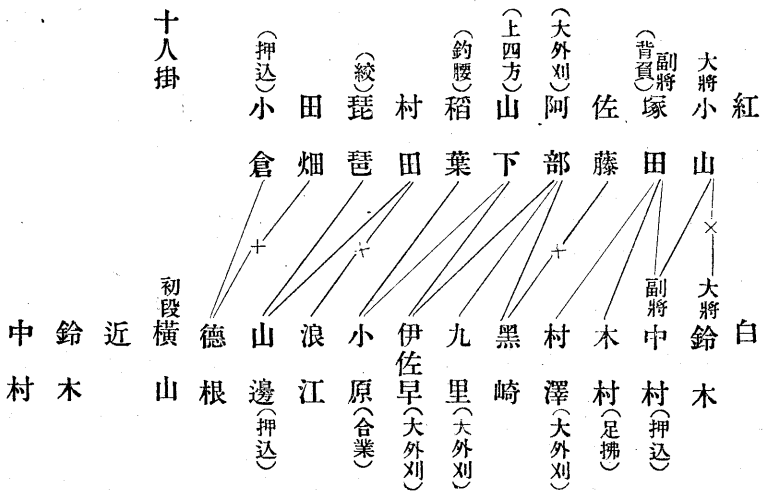
- 一等 (無シ)
- 二等 (無シ)
- 三等 齋藤正意

柔道部報

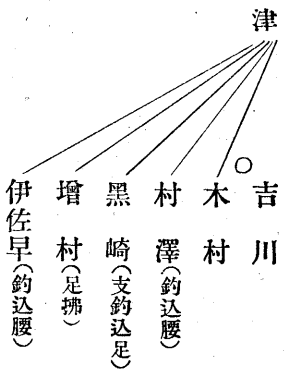
五月三十一日。名聲天下に聞ゆる斯界の驍將中野四段の來澤を機とし、稽古を乞ひしに快く承諾せられ午後三時より二時間餘ブツ續けにて多數の部員に熱心に稽古をせられたり。部員一同の誠に感謝に堪へざる所なり。

六月二日。送別試合。來る八月下旬を期して當部主催の下に行はるべき北陸東海柔道大會の爲め經費の都合上極めて質素に行はれたり。紀念の撮影を終り午後四時試合開始、卒業生が最後の奮闘と之を餞と戦つた殘留生の武者振は共

に目醒ましあものなり。



二段大 (足車)



以上

庭球部報

○復たの涙

■星は南に流れた。雲は北に収まつた。冬の名残を告ぐる鐘は野田山の森の中から響いて來た。そして同時に戦を宣べる鐘の響でもあつた。

吹雪の精が地の上から凡ての生の分子を奪ひ去つて北國の空はただ灰すんで居た時でも我が心には熄むに熄まぬ焰が燃えてゐた。去年の四

月——否な先代の四月——の七日から淋しい尾山の春に嘖まれてゐた我が心にはそれに反抗するだけの力が置かれてゐた。

勝に誇つた洞衣の星模様につけ我が心の焔は熾んとなつた。——雪と戦つた。寒さと闘つた。私慾とも戦つた。壓迫とも闘つた。そして凡てに克つことができた。

■賽は投げられた。暗い底をした怖ぢ氣のさす河も渡られてしまつた。戟の音。矢の叫。それが空耳にも聞えてくる。三月三十一日の夜遂に足を「南へ」の第一歩と踏み出した。

「南下の氣分」を握手や花環で味つけながら我れと應援團とは客車に分乗した。歡呼が起つた。握手が縫まれた。銀鈴は揺れて鐵車は動いた。熱腸は一時に開かれて火腔はそれと共に破れた。而し我が心に建てられて居た自信の臺がその刹那に崩れかけた。「師への言を欺かぬことになれ

ばよい」友を偽らないやうに努めねばならぬ。」梁に音があつた時にこんな韻が含まれて居た。

■四月一日——保養館の階上に横たはつた選手の腕には凛々しの音が高められた、煤の匂にも色にも若き男の兒の血は濁りも染まりもしなかつた。そして北洛の地に起つて居る嬉しい巷に眼を瞻つた。

我が敵は三高である。六高である。大坂高商である。俱に過去の歴史に勝の印と誇りの瀝を存してゐるのである。此の日の戦は三高が六高を倒したと聞いた。八高が高商を屠つたのを見た。かくしてその夜は夢を抱きながら終つた。

■四月二日——三高對本校試合

先人の骨は靈火を送つた。學友の肉は憤血を吐いた、骨に浸み肉を噛つた怨恨の敵を倒さないで却つて屠られてしまつた我が慘めな腕、頼みかひのない男だ、誓を破つた漢だと罵られて

も嘲られても甘じて受けやう。また洛陽の地は濕つぽくなつてしまつた。

空は晴れて居た東山の若葉から何かの暗示があつた。連つたり切れたりしてゐた靄には心の共鳴があつた。

十時五分、火蓋は切られた。

三 高	四 高
荒川谷	河合新
松木下	河合新
河木村	野竹
河木村	若大
山田本	塚邊
山田本	内藤

○坂中野三
二河合新倉

四高は最氣銳の河合組を先鋒とした。花を欺く若殿は小袖輕やかに戦つた。三高の先鋒荒川組は谷治の有効なる前衛をもちながらも河合の強球に壓せられ殆んど反撥の力なく自滅且零敗した。松木組は戰友の爲めに立つた、下の家系的な盛名は人目に値した、一ゲームは敵に譲つたが二ゲームは河合のプレイングが極端に効を奏した。ゲーム二オールとなつて試合は緊張に傾いた。緊張は緊張を生んでる中を河合組は奮戦した。松木組も活躍した。そしてデユース八回續いた三十一分の後で勝は河合組に落ちた。敵勢は挫けたがなほ孫吳の兵を知るものがあつた。四高野田組の戦つた頃に風が東北から吹き出した。そして直ぐ西北と向を更へた。野田のプレイングは最初のゲームに出藍の觀があ

つたが二ゲームから球勢が定まらないで破れ若

林組は弔合戦と現はれた。若林の緩長球は時の利を失つた。風の爲めに抑制せられ且敵の前衛木村の捕ふるところとなつて惜しくも破れた。三高の副將は山本組で前衛有田のスマツシングを以て最高唯一の武器として居た。塚田組は幾分遜色があつたが塚田の敏なると渡邊の快なる

た、我れは旗を捨てた。噫、此度の一戦でこの南下を「復たの涙」の表題でレコードせねばならぬ。花の郷は雪の里よりも凄みかあつた。嘸み下す涙は劍よりも硬かつた。怒を高めて後の二戦を祈るより外なす術とてなかつた。

とはよく之に應戦した。塚田の退いた後を静かに現はれたのは内藤組であつた。内藤は有田を游泳せしめやうとしてロツピングを送つたが時に魔の風がボールを吹き流いて守田の牽制も効なく二好漢は徒にして倒れたのは遺憾であつた

四月三日——雨が降つた、御所のあたりから吹き流す黒い雲は飽くまで男の腸を搾つた。切齒扼腕會稽の耻を雪がんとした若い力が徒らに過ぎ行く時を掴まうとしたがしかし空に嘯くばかりであつた。その日一日は晴れなかつた。ぬかるみにはまだ洗ひ清められない涙の面影が寫されて居た。

——今でも遺憾である——、今や全責任は河合組一ツに懸つて居た。死生はこの若武者の一得で動き一失で動くべきである、そして目ざすは敵の大將坂組であつた。……河合組は終に大厦を支ふることが出来なかつた。敵は箆を敲い

四月四日——本校對大坂高商試合
霽れた。陽炎のたちのぼる薨から都會の氣分が充分にあらはされて居た、風が濕つた空氣を誘ひながら吉田のあたりに徘徊した、午前十一

時半、戦鼓が打ち鳴らされた喊聲が起つた。

四 高 大坂高商

○新河合 三 齋和 藤田

○新河合 二 松平 本松

○若西 三 松平 本松

○若西 三 伊岡 藤島

○竹野内 三 伊岡 藤島

○竹野内 三 喜多村 中島

○内藤 三 喜多村 中島

○内藤 三 井上 山

不戦組、四高、一塚田渡邊

四高河合組再び先鋒の命を拜した、河合は昨

日に比べて幾分當りが悪るかつたに拘はらずよく捷ち得たのは新倉の確實なスマツシングと敵の後衛和田のアウトに原因して居た。平松組も河合組の敵ではなかつたが勝負は豫め言ふ事を許さないで不幸にして倒れた、代つて立つた若林組は風と人との敵をうけて奮闘した。風は後衛の伸ふるを妨げたと共に前衛の活動に充分の餘地を與へた。前衛は大西に於て技が優れてゐたとせねばならなかつた、だから若林組平松組の戦は若林組の勝であつた。次で立つた岡島組は今までの雁行に亂れを生せしめやうと現はれた。彼は第一の敵をば苦戦の末に破ることが出来たが野田組の全く毛色の異つた戦法に應ずるや野田の窺虚と竹内の盗球の巧妙に折角の決心も水泡化して喜多村に偉業を譲るべく餘儀なくされた。喜多村組は高商の大將をも凌駕する副將組である、よく野田のバツクを衝き竹内の弱

所を攻めた爲めに野田組は惜しくも倒れた、而し内藤組は昨日に數倍した技を發揮して敵の大望の眼を醒ましくれんと起つた。内藤の強球は風に逆つてまで敵を壓し守田はその弱球となつて反つてくる敵のボールを自由に玩んだ、最も單調な而も最も綺麗な試合で喜多村組は零敗した、雁行の隊形はなほこれまで續いた、四高はなほ塚田組ありと雖一校の勝敗は懸つて内藤井上兩組にあつた。しかも四高も高商も共に一戦一敗の可憐兒なるだけそれだけこのゲームは緊張した、内藤はコートを繰つた。守田はそれに應じて敵を牽制した、敵の前衛鳥山はよく活動したが驢馬の力行であつた、彼れはよくボールを捕るだけに失點に巧であつた、敵はかくして自滅に近づきつゝ鳥山のバックボールアウトで自列零敗した。

哀愁の臍が現はれたのは二時二十分であつた。敵は二戦二敗、我は二戦一勝した……。

明日もまた狩の日や西赤し
四月五日——本校對六高試合

半は喜悅、半は悲愁、こんな夢から醒めた五日は我が最終の戦の日であつた。既に昨日の戦報で月桂冠は三高か八高と定められたがために我が望むところは最後まで奮闘と墮落した。

この日また東南の風が威高う吹いてゐた。午後一時十五分黒い帳は切り落されて舞臺は展開された。陣鼓は風のまに／＼響き渡つた。

四高 六高
（若）林三 二（三）浦
（大）西三 三（麻）生
（若）林三 〇（細）川
（大）西三 三（越）路
（塚）田一 三（越）路
（渡）邊一 三（越）路

彼れは三浦組を屠り細川組を零敗せしめた、塚田組と戈を交へた越路組は四方田のスマツシングで勝を得たが河合の弔合戦で光秀の轍に倣つた。六高の副將加藤組は加藤の安全球と山下の巧妙によつて四高軍を粉碎せん自負があつた。河合の強球は山下の三步にてコートを横断する大モーションに對しては無効であつた。天は我に幸した、風を鎮めて河合に救命の繩を垂れた。河合は彼れの最も正確なるロッピングを以て加藤の強球に應へた、新倉はその間に漁夫たらんとして時々利を得た。加藤は全く游泳した、新倉のスマツシングは敵の虚を衝いて河合組は優退した。次で現はれた内藤組宮本組は兩軍の兩將であつた。而し宮本組は先に屠られた加藤組よりは劣つて居ることは豫てより定評があつた。三時、兩將は嚴肅の中に現はれた。宮本は不安定であつた。而るに内藤はコントロー

（河）合三 一（越）路〇
（新）倉三 二（加）藤
〇（内）藤三 〇（宮）本
（守）田三 〇（大）川
不戦組 四高—野田、竹内
六高は三高五高の爲めに屠られてゐた、昨の優者は今の勝者ではない。鳥山の農大に去つてから六高は昨の花時を夢みて居た。憧憬れて居た。その憧憬の心が強いだけに彼れは哀史の一部を抹殺しやうと力めた、而し我れとても今まで嘗めた事のない高等學校を屠らうとする熱望を六高で満足せしめんとした。奮闘と奮闘、強烈と強烈、これは四高と六高の戦況であつた。若林組は今度の先鋒であつた。風位は彼れのレツシーブサイドであることを欲せなかつたが若林の額から滴る汗は彼れの苦戦を表はしながら

（八五）

ル巧にして守田は擲球誤るところがなかつた。六高は勝の誇から遠ざかつて遂に三戦三敗の深き愁潮に巻きこまれた。

戦報は尾山城の友を悦はせたことだらう、しかし我は三戦二勝といふ惨めなもので終つたのだ。北國の天地は春になつたといふものゝ寒い雨が混つて來るといふわけのものである、

四月六日——夜の八時。旗を齎さないことを涙に語りながら京都を去つた。翌朝再び涙で友に會つた。金澤はやはり寒い雨が降つて居た、「超然」といふ旗を見上げた眼で友の心に詫びながら一同退散した。出づる時と歸る時との氣分の違ふのに自分ながら驚いた。

「復たの涙」といふ記録は書きたくなかつたのだ。しかし書かねばならなくなつた。筆者はこのことを書くにあつて四高七百の健兒を欺いたことを悔ゆるのである。そして金澤の覇は天

下の覇でないといふ強い自覺を筆者の愛敬する選手諸君に希望するのである。

筆者は此の記録をするの終りに左の句を耕三源四郎、利廣の三君に贈つて三君の努力と一致とを祈るものである。(琢白生)

花間へば未だ早し御室路反る
稿は終へず遺さん花を賣る京に
餘憤もらすその憂さ旅を花の鐘
獲らで戻る氣まぎれの牧歌花何と
いつものこと自嘲なれど悲喜大まかに。

春季大會

緑なす柔き樹の枝に小鳥チ、と歌へば讀みたる書籍をなげやりて或は暖く心地よき街に或は柳の芽青き川邊に誘ひし春はくれてはや我校庭に白き蒲公英は散り黄なる毛茸は亂れ咲く初夏

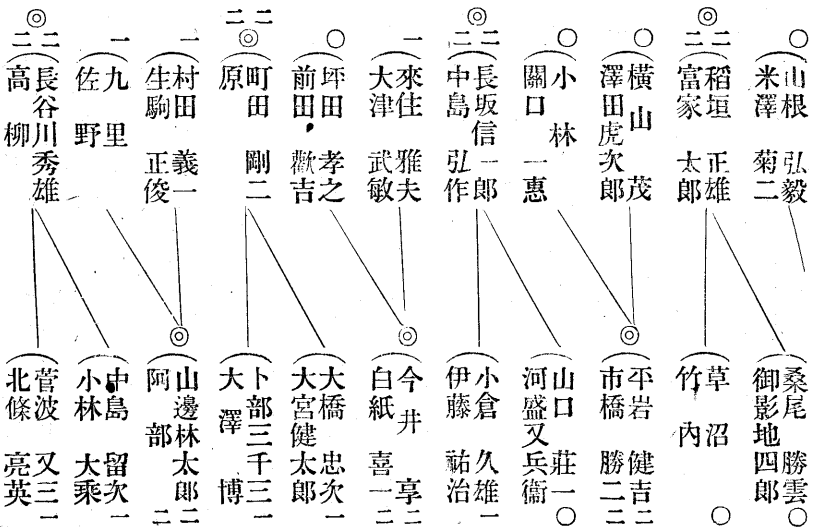
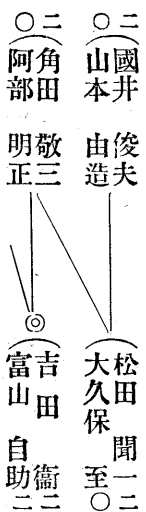
とはなりぬ。

古の詩人が目に「青葉」と吟じけむ緑が光の世界は我等を春行樂の淡き夢より目覺めしめ緑樹吹き揺がすそよ風は勇しき戦を想はしむ、げにや我等が戦ふ時は來りぬ、

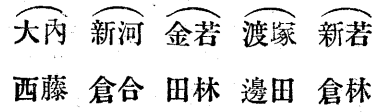
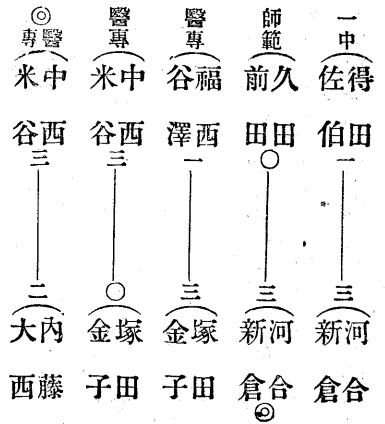
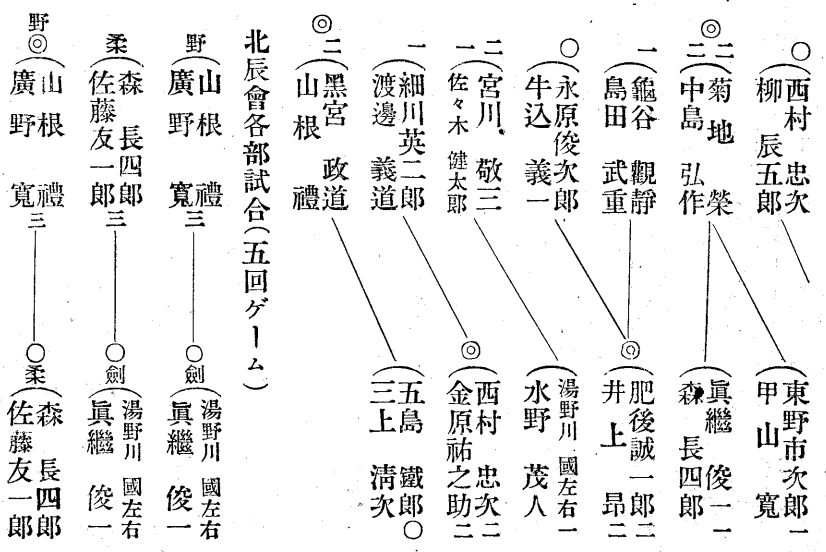
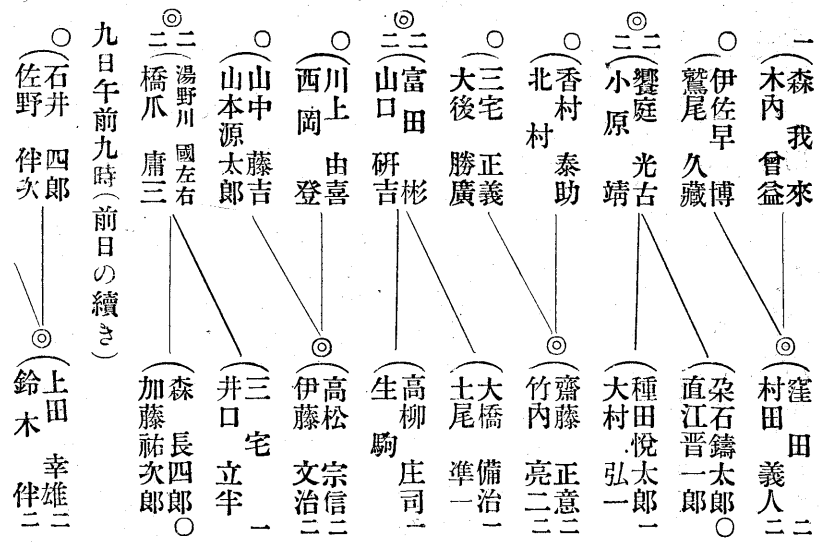
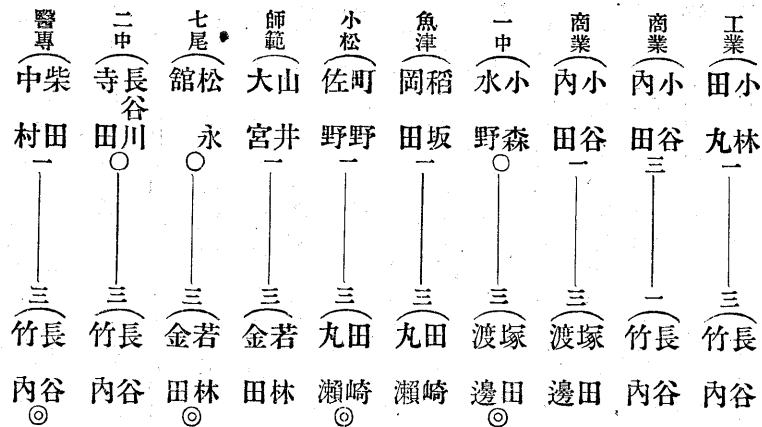
あはれ洛陽の地敗れし我庭球部は過ぎにし追懷に涙する暇さへ得ずして盡きざる勇氣と絶えざる努力とをつくして日々初夏の勇氣に滿てる世界の中にあつていよくその技をばげみしが今や時熟して春季大會を五月八九兩日もて開く事とはなりぬ。

いざや戦の後の喜ばしき悲しき思出を下に掲げん哉。

五月八日午後一時より 三回ゲーム



對外紅白試合(五回ゲーム)



對富山庭球團試合

吾は莞爾として五月三十日に彼等を迎へた。熱いデリデリと照る日光を浴びて醫專の柴田君の審判で午後二時十分には鋒は交えられた。

富山 本校

(北) 窪野 ○ — 三 塚邊 田

(山) 柴田 — 三 塚邊 田

(庄) 龜谷 ○ — 三 新倉 合

(密) 住山 ○ — 三 新倉 合

(若) 西林

(内) 金子 藤

五月も半ば過ぎて一日一日と烈しさを増す日の光は一しほ強く緑の樹陰を地上に浮き出させた、我等の兩腕に満ち／＼た力は胸に戦へ戦へと叫ぶ、醫專との定期試合は我等の華かな歴史と強い自信と鮮かな實力とに恐れるか不調に終つた。

唯空しく腕をさすつて日を過した。

時しも北の方より薫る風は喜しき報をもたらした。

富山庭球團來る!!! 富山庭球團來る!!!

如何に吾等の血液を湧かした事だらう。

彼は三度敗殘の悲しい思出に沈んで神通川の邊に彼の白い立山を眺めて悲憤の涙にくれて練習怠りなかつたが力つきてか捲土重來の勢で尾山城下に迫つた。

吾等は優退二組不戦組二組と云ふ最大限度の大スコアを作つて彼を倒した、彼は亦我的敵ではなかつた、天馬空を行くの勢とは此試合に

適した形容句であると思ふ。

遠足部報

寶達山登山記

九十の春光は夢の如くに流れて今や新緑人を襲ひ薫風楚々として輕衿の裾を掃ふ頃となつた先きに我遠足部は木津の桃林を訪ふて其の艶媚の粧を心ゆくばかり賞しようと思つたが生憎四月中の各日曜日には色々と學校に行事があつて

決行することが出来なかつた其の間にタイムは容赦なく流れて濃艶な桃の花も何時しか泥土に委して青い珠玉が枝頭を飾るやうになつたそこで我部は河北潟の彼方から初夏の新粧を凝らし

て朝夕に吾等を招いて居る寶達山に登つて本學年最後のペイチを飾ることになつたのである。

五月十五日土曜の課業を終へ教室を飛出して

吾は莞爾として五月三十日に彼等を迎へた。熱いデリデリと照る日光を浴びて醫專の柴田君の審判で午後二時十分には鋒は交えられた。富山 本校 (北) 窪野 ○ — 三 塚邊 田 (山) 柴田 — 三 塚邊 田 (庄) 龜谷 ○ — 三 新倉 合 (密) 住山 ○ — 三 新倉 合 (若) 西林 (内) 金子 藤

團となつて下車した一行は見る／＼蜘蛛の子を散らしたやうに隔つてしまつた津幡の町端れの店で各々夏蜜柑一箇づつもらつて三々五々と思々の話に耽りつゝ寶達村へと六里の行程を急いだのであつた。

村落の家の家も鬱々たる樹木に圍まれてあるのだ北陸特有の景色である關西地方に見られるやうに千畝數里に連り青麥風に起伏して波浪の如く紫雲英鬢鬚として彩霞搖曳する艶麗な風景は求められないが青葉若葉茂り合つた此等の村を越え里を過ぎる初夏の北陸の旅は又一入の趣があつて見るから胸が清々するのである吾等數人のグルッペは草鞋の足音もいと軽く右を見左を眺め一日一日と黒すんでゆく新緑のむせかへるやうな香を吸ひつゝ急いた其の中の某君は遠足部から今夜の山村の宿の無聊を醫し一同の勞を犒ふため桂月から持つて來た大きな菓子を入

つた袋を大黒様のやうに負ふて居たが途上の疲を忘れるためメツチエン持といふことをやり娘に遇つたら次の人に渡し各々交替で持つことに定めたところが田舎のことではあるし殊に丁度農桑繁忙の時期とて中々お誂らへ向きにメツチエンは來て呉れない前方にそれらしいものが現はれたと喜ぶとそれは飛んでもないお婆さんであつたりして腹を抱へて笑ふことはかり時には眞正のメツチエンがやつて來たので將に袋をとり下ろして次の人に渡さうと構へて居ると急に數間のところで横に逸れるやうな悪戯をやることもあつて中々面白かつたそれがため足の疲れも忘れてしまつて宇野氣高松等を知らぬ間に通り過ぎて大海とかいふ村へかゝつた丁度街道の傍に小學校があつて庭の一隅で一教員が堀抜井戸の笕を修繕して居たから水を求めた此の先生非常に快活な人で元氣よく色々のことを話して

呉れたり堀抜の蓋の錠をわざ／＼はづしてブクブク吹き出して居る清冽な水を見せて呉れたりした。

目的の寶達村へはもう一里しかないと聞き新たなる元氣を出してそこを辭し去り次第に襲ひ來る暮色に包まれて夢のやうに聳えて居る寶達山に明日の登山の快を思ひつゝ二三の里を過ぎ小川といふ村から右に折れ石灰小屋の並んだ息苦しい所を通り抜け石灰石を運ぶトロツクのレールに沿ひ燃ゆるやうな夕陽を背にして七時頃漸くにして寶達村の宿屋に草鞋を解くこと出來た。

夕飯後一同は桂月の菓子を摘みながら面白い話をした朴直な山村のことであるから宿屋では其の全力を擧げて歡待して呉れた僻村の宿屋としては過ぎた夜具に疲れた身軀を横たへ小田に鳴く蛙のかまびすしい聲に故郷を偲んで居る中

何時しか夢路を辿るやうになつた。

第二日

八時頃出立するやうな話だつたから朝朝つくり眠られると楽しんで居たのに五時頃に起こされたずる／＼構へて殘夢を食らうと思つても下女が傍の夜具をバタ／＼たゝむので眠られない其の上上天氣だと人々の喜ぶ聲を聞いて何となく心が躍るので起き出で、宅前の小流で洗面した清冽な水に氣が晴々した冷やかな清い朝の空氣に漂ふ幽かな若葉の香を吸ひつゝ村を一巡した實に靜かな村であるこんな所で怨もなく悔もなく其の境遇に満足して居る村民を憫れみながらも羨しいと思つた。

六時頃一同は結束して宿を出で寶達川の溪谷に分け入つた冷やかな薰風に吹かれて靜かな溪谷を溯る時の愉快さ六時といへば寮ではまだ殘夢を貪つて居る最中である世に朝寢するほど馬

鹿らしいことはあるまいと其の時しみくと思つた。

一足毎に爪先き上りとなつて青葉の匂ゆかしい山路に分け入つた最初の程は細いながらもどうやら路があつたが何時か消えてしまつて灌木の中へ踏み込んでしまつた先登に立つた遠足部の快男子某君が元氣な歌を静かな山に響かしてすん／＼登つてゆくから一同これに勵まされて夫に續いた我等は全く逆茂木の中にはいつたやうで鋭枝槎枒として頭を遮るかと思ふと鎖のやうな蔓が足をすくはうとするために行進は遅遅として捗らないが一同は醫王山の痛快な數ぐりに經驗のある猛者ばかりだから少しも痺むやうなことなく前進を續けた。

只一度歩を停めて能登の山河を眼下に見下ろしつゝ夏蜜柑をむき虎杖を吸ひて新しい元氣を養ひ漸くにして山頂に辿り着いたが目的の寶

達山は遙か彼方に聳え立つて居るのであつた即ち我等はどうした機みか路を踏み迷ふたのである元氣旺盛なる一同は汽車で今朝來る筈になつて居る人を迎へるために待つて居られる林先生を殘して椿や躑躅の灌木林を分け進んだが嶺を二つ越えた時殘る一嶺は迎も越えられそうになかつたので雄壯な眺望を恣にしたのをせめての心遣りとして残念乍ら野田指して下山した。

麓の百姓家で水を飲んで休憩して居ると最後に下つて來た連中が今朝汽車で來た連中は既に寶達山の頂に立つて居たと言ふたのでそれぢや我々ももう一度登り直そうといふことになつて血氣の青年十數名は草鞋の紐をしめ直して元氣よく登山した。

深川に沿ひ細道を辿ること一里餘りで無事に目的の山頂に着いた何のことだ始めから迷はずに登れば易々として山頂に達せられたのであ

土曜會記事

な苦しい目をして而も飛んでもない山に登つて居たとはすいぶん馬鹿氣た話だ山の神も思切つた悪戯をするものだと思つた。

抑此の山は海拔二千餘尺能登第一の高山であるから山頂の眺望は實に壯快限りなく加能越の山河は言はずもがな一方には一碧萬頃水天相搏つ日本海を脚下に臨み他方には翠峯遙々として雲涯に聳ゆる日本アルプスの連山を一眸の下に

收め壯絶快絶言語に絶した眺めであつた自分はこの眺望の萬分の一をも筆にすることの出來ないのを深く憾みとするのである。

かくて三十分間ほど此の雄大な眺望を恣にし十一時頃下山の途に就いたが自分は或る溪川に休んで辨當を開いて居たため一同に遅れ全速力を以て石動に向つたけれども一同と共に歸ると出來ないで午後七時五十一分の汽車で愉快な遠足を終へて歸寮したのであつた。K.S.生

同好の士相集りて近郊に遠足し以て土曜の半日を最も有意義に送らんがため一昨年始めて生れたる土曜會は本年度に於て左記の如く大發展をなし金澤附近の地殆ど我會員の足跡を印せざるところなきに至れり吾等は來學年度に於てより大なる活動をなさんことを期す。

遠足期日	目的地	参加人員
十月四日	醫王山に登る	五十四名
十月十一日	山野横斷競走	六十名
十月廿、廿六日	五箇山二泊遠足	五十六名
十月三十一日	戸室山に登る	十六名
十一月七日	辰口温泉に一泊遠足	十五名
十一月十四日	上辰巳發電所を訪ふ	九名
十一月二十八日	二俣本泉寺に行きて夕食を共にす	十九名
一月三十一日	兎狩	四十四名

二月二十日	近郊遠足	三名	ちがひである、九月以來特に差支へのあつた場合のほかは毎週一時間づゝ、聲樂の練習をやつて
二月二十七日	松任遠足	九名	來た、毎回集りは百名を内外した、刷り物にした樂譜が不足して委員が面喰つたことやあの廣
四月十日	傳燈寺古蹟を訪ふ	十名	い物理室が一ばいになつて戸口にあふれたこと
四月十七日	俱利伽羅古戰場を弔ふ	三十四名	も一二度ではなかつた、其の間大西安世先生が
五月一日	黒壁に遠足して筍飯を共にす	十九名	あの水際立つたスタイルで根氣よくタクトして
五月八日	倉ヶ嶽に登る	三名	下さつた事は一同が心から感謝する處である、
五月十五日、六日	寶達山登山一泊遠足	二十名	勿論このほかに熱心家は各自器樂の研究を怠ら

尚本會の規定に基き本年度の多數參加者鷺尾 下さつた事は一同が心から感謝する處である、
 蟄龍君大野一六君増澤真純君渡邊禮君森井初郎 演奏會のステージに遺憾なく發表された殊に生
 君鷺尾久藏君に銀メダルを贈呈することゝなれ 演奏會のステージに遺憾なく發表された殊に生
 り。

音樂部報

(附 大演奏會短評)

本學年度の音樂部は近年見ない活氣を呈した
 去年あたりとくらべては殆ど飢饉と豊年ほどの
 賞讃の喝采裡に散開されたことは今思つても汗
 が出る様である、この夜の演奏に就ては別に妄

評を試みるつもりであつたが丁度我が一友の書
 を寄せてこれを評すること詳かなるものがあつ
 たからいつそそれをそのまゝここに載せること
 にした、その方が却つて自分がかくよりも手前
 味噌がなくて公平といふ点にもボンビリチーが
 多いから終りに當夜オーガンおかし下すつた女
 子師範の附屬校及ピアノをおかし下さつた堂
 本夫人に厚く御禮を申し上げる。(松)

や好樂家で溢れた、私は眞のアマチュアだか
 ら批評なんてそんな立派なものを書けないが單
 に同夜受けた感想だけを書き連ねる。

一、ヴァイオリン二重奏(ハルトブルグマー
 チ)

二、オーガン獨奏(ウォーターローの戦ひ)

四高音樂會を聴く

X・Y・Z 生

一年の中で私達の一等好きな五月の最初の夜
 電燈まばゆき至誠堂で北辰會の演奏會が開かれ
 た、久しく諒闇の爲めに中止されて居た而して
 當地に於て或る特殊な趣を有つて居る同會の演
 奏會だと云ふのでさしも廣き堂は若々しい學生

悲しい事には奏者は公開の際に演奏する技倆が
 ない、タイム(拍子)が不正確で四分音符と八
 分音符との長さを同じにしてしまつたがあれで
 はお話にならないだからバスが速くなつたりメ
 ロディーが速くなつたりして和音が崩れて全く
 曲を壊してしまつた、戦になる前や眞の競争の
 所や少しも味ふ事が出来なかつた、奏者は努力

を嫌はず良師につき益研究せられむ事を希ふ。
三、尺八 部 員

呉れた、別してハイドンのオーストラリヤなんかは面白かつた。

四、ハーモニカ獨奏 部 員

七、オーガン獨奏(甲、花咲く春乙、神よ!信する神!よ(バッハ作) 岡本新一氏

厳正な意味で言ふならば斯くの如き楽器は音樂會に不相應なものだ曲は「君か代マーチ」だつたが勝手な音を時々入れて不快であつた。

同氏の出演は當地に於ての最初の試みだから聴衆は好奇心をもつて熱心に聞いた、甲の曲よりも乙のスベステアンバッハの曲が楽器にしつくり合つて居たから非常に良かった、氏がオーガニストとして尊敬に價する資格を充分有して居る事はこの二曲で確めることが出来た。

五、ヴァイオリン二重奏(軍隊行進曲) 部 員

奏者は第一番と同じピアノやフォルテが少しあらはされた。

十、ピッコロ獨奏(ヴルセプリュー)

六、ピアノ獨彈 スペイト教授

此の楽器はソロに不相應だ、あれでもピアノの伴奏が附くと引き立つたかも知れない、エクトプレッションが皆無だつた、今少し勉強して欲しい。

同夜の曲目中で參聽者の一番期待したものは同氏のピアノソロであつたが惜しい哉各國の唱歌と言ふ小品の紹介で物足りなかつた。然し各國の歌を理解のある弾き方で氣持よく聴かして

十一、ヴァイオリン獨奏(アダチオハイドン

作)

大西 安世氏

金澤第一のピアニストでありヴァイオリニストである氏の出演に際しては拍手を以て迎へたが豫期と全く反した結果を残して仕舞つた曲は速いものでない爲めに時々素人のヴァイオリン弾きならば沈み勝ちになるものだが同夜はどうした事か氏の如き専門家が活氣のない神經臭い者に弾いてしまつた、ハイドンの作と思はれなかつた此曲は過ぐる年メンヂスト教會でヘンガー夫人の伴奏で同氏が彈奏して非常に名聲を得たものにかゝわらず同夜の不成績は如何したことであらう、Bから同線のAへ上るときAの音を外したのは練習不足と云ふべきか、氏よ自ら街ふ事なく細心の注意を以て演奏して貰ひたい。

派なものだ、嚴密な聲樂として批判するならば一二言ひたいこともあるが純聲樂家ではないからこゝには止める、私は斯の如き良音樂家を得た女子師範の大なる幸福を思ふ。

十三、ピアノ獨彈(キングカールマーチ)

奏者は單にピアノを鳴らせるのだ、バスが馬鹿に強くてメロデーが弱い爲めに何を弾いて居るのかわからなかつた。

十四、絃樂四重奏(フィナーレ ハイドン)

有 志

四人とも活氣がなくて「終曲」らしく味はれなかつた、第二ヴァイオリンの音が弱き爲めにヴァイオラが強くひいた。

十二、男聲獨唱(故郷の廢家)

十六、オーケストラ(君が代)

岡本新一氏

有志部員合同

オーガニストとしての氏は聲樂家としても亦立

國歌の演奏だから批評はやめる。

總評

○概して言へば學生主催の音樂會として上出来
だった。

○プログラムと實際の順序と大變相違したのは
遺憾だった、以後はなるべく確かな處を印刷
して欲しい。

○器樂の演奏ばかり數多くて聲樂は只一回で物
足りなかつた、合唱や二部を此の次には是非
二三回出して貰ひたい。

○最後のオーケストラはなるほどピッコロと言
ふ管樂器が入つて居たがあれでは人を馬鹿に
するにも程がある、ピアノでも弾くとよか
つたのに……。

講演部報

○第三次演說例會

四月廿四日夜至誠堂に於て演說例會を催す。
辯士の來りて熱辯を振ふの少なく聽衆亦寥々。
春の悲哀を感じてか將た春の歡樂に酔ふてか。
咄。

天を相手にせよ 中山 喜久松君

再び汎日本主義 小原 正樹君

生命の問題 篠原 雄君

○公開演說會

新緑の色が尾山の森に黒い程濃くなつて來た
五月九日の午後一時に公開演說會を市公會堂で
開いた。

吾等が多年標榜し來た超然の力と衷心より迸
り出づる覺醒の叫は穩健にして保守的な市民に

多大の感動を與へた。

一、開會の辭 河合 教授

一、聖書研究の趣味 大宮健太郎君

聖書の研究は我等の内面的修養し多大の効果
あるのみならず智的活動の上にも利益多し。

一、破壊と建設 小原 正樹君

青年は破壊思想に富む吾人は常に現在に満足
せず之を破壊し時代の進歩を計るべし而も之
に意義ある建設を伴ふを要す。

一、帝國主義と道徳 鈴木 豊君

帝國主義と道徳とは決して矛盾するものに非
ず、吾人は此の帝國主義を道徳の範圍内に於
て活用せざるべからず。

一、機會を捉へよ 野中 徹也君

機會は來れり吾人は此の機に乗じ消極的手段
を避けて積極的方針を取り商業に政治に移民
に充分に活躍して帝國永遠の基礎を造らざる

べからず。

一、東洋將來の局面 角田 敬三君

將來世界の爭覇戰は必ず太平洋上に起らん、
其の際黄色人種の頼む所は我が力なり吾人は
充分自覺して意義ある活動を爲さるべから
ず。

一、國力の充實 川上 由喜君

東洋永遠の平和は此一に帝國の双肩にかゝる
ものなり、吾人は將來に鑑み外に發展せんよ
り先づ内を固くし土地資本勞働の調和統一を
計るを急とす。

一、愕堂論 竹田 儀一君

愕堂は高潔にして廉耻なり、彼の人格や偉に
して彼の辯や雄なり彼は現代政治家の師表な
り木鐸なり。

一、中心意思 篠原 雄君

社會には中心意思なる力あり、而も之は個々

の意思の上に表はる。個々の發達は即ち社會の發達なり吾人は理想を遠大にして國家人類の理想を一致せしめ以て國家人類の發展を計るべし。

一、我行かんとする道 石川 教授

人に善惡二面あり、自覺せる人は常に善に赴き惡を避けんとして努力し憂悶す、之等は何によりて解決せんとするか、余は道を神に求めぬ、然れども吾が行かんとする道はトルストイ、ビルビゴアの取りし自力か、ワットマンの取りし他力か。非ず絶對の眞理なり。

一、先驅者の悲劇 岩城 教授

思想界に正斷と反斷とあり此の兩者が形式的に反覆して而も内面的に進歩す。此の時代の潮流を達觀して進むものは先驅者なり、彼等は天才的なる自我の念強き感情家にして皆其の最後や悲惨なり。之彼等は批判を現世に求

めずして未來の知己に求むればなり。

一、閉會の辭 八波 教授

寄贈雜誌

桃 陰	第五二號	天王寺中學校校友會	校友會々報	第一六號	三重縣立第四中學校校友會
龍南會雜誌	每三號	第五高等學校	和同會雜誌	每三號	盛岡高等農林學校
校友會々誌	第二六號	廣島高等師範學校	輔仁會雜誌	第九四號	長岡中學校
十全會雜誌	每二號	金澤醫學專門學校	尙志會雜誌	第一〇一號	學習院
嶽水會雜誌	每三號	第三高等學校	校友會雜誌	第四〇號	第六高等學校
糜 城	第三五號	大垣中學校校友會	櫻桂會誌	第二三號	第二高等學校
學友會雜誌	第三六號	石川縣師範學校	學友會報	每三號	石川縣立工業學校
修養會雜誌	第二三號	高田中學校	校友會雜誌	第二〇號	關東都督府中學校
學友會雜誌	第二三號	沖繩縣立第一中學校	校友會雜誌	第四六號	神戶高等商業學校
六條學報	每三號	佛 教 大 學	七 星	第四七號	柏 原 中 學 校
學友會々報	第二三號	石川縣立農學學校	校友會雜誌	第二五號	飯 田 中 學 校
校友會雜誌	第四六號	麻 市 中 學 校	ゴキッ	每三號	千 葉 中 學 校
學友會誌	第一〇號	京 都 帝 國 大 學	學友會雜誌	第四七號	柏 原 中 學 校
校友會報	第四號	千葉縣立園藝學校	校友會雜誌	第二三號	關 東 都 督 府 中 學 校
校友會誌	第一六號	金 澤 商 業 學 校	神戶青年	第三二號	神戶高等學校時習寮
校友會雜誌	第一四〇及	第 一 高 等 學 校	超 然	第一七號	大 成 中 學 校
校友會名簿	第一四〇及	京 北 中 學 校	校友會誌	第一四號	神戶基督教青年會
坂東太郎	第五三號	金 澤 第 一 中 學 校	一橋會雜誌	第一〇六號	東 等 高 等 師 範 學 校
	第五四號	前 橋 中 學 校 學 友 會		第一〇七號	東 京 高 等 商 業 學 校
	第六一號			第一〇九號	

學友會雜誌	第三〇號	札幌 中 學校
同窓會雜誌	第一九號	高知縣立第一中學校
之餘會報	第一〇號	七尾 中 學校
校友會雜誌	第三一號	京 北 中 學校
しら峰	第一四號	小松 中學校校友會
文武會誌	第二六號	富 山 中 學校
校友會雜誌	第五二號	三重縣立第一中學校
城 北	第五五號	東京府立第四中學校校友會
學友會雜誌	第一四號	村 上 中 學校
學友會誌	第一三號	魚 津 中 學校
鯉 城	第二四號	廣 島 中學校校友會
桐陰會雜誌	第五七號	東京高師附屬中學校
道 交	創立第一五 年紀念號	仙臺市道交會自治寮
學友會雜誌	第一〇號	上 川 中 學校
矯々會雜誌	第一〇六號	福岡縣立中學明善校
保惠會雜誌	第一〇八號	松 山 中 學校
校友會雜誌	第二一號	彦 根 中 學校
學友會雜誌	開 校紀念號 十周年紀念號	山口高等商業學校
照 星	第二五號	金澤第二中學校照星會
寄宿舍誌	第二號	京都帝國大學寄宿舍